翻刻

『春城日誌』（一一）

――明治四一年七月～一二月――

春城日誌研究会

『春城日誌』は、通例年に二冊（榛原製の小型の用箋一冊約九〇丁）に収まっている。しかしこの年は、自ら特記しているように、三冊目の半ばまで費してしまい「本年の多事知るべし」と加筆した。

学苑の第二期発展計画の遂行の中枢に居ながら、日本図書館協会々長として活躍する一方、自らの豊かな趣味の分野にも並々ならぬ関心を持ち行動する文字どおり八面六臂ぶりが如実に窺える一年である。

まず学苑の第二期計画（理工科の再興と医科の新設）のための募金活動では、七月の新潟への長期出張があり、九月になると大隈信常に替り、自ら募金部長となりその陣頭に立った。その後一一月に、桂太郎首相や松方正義侯爵、あるいは、一時大隈の仇敵と見なされていた伊藤博文韓国統監を訪れ、校賓に加って貰い、同時に寄付に応じてもらうなどしている。翌一二月には、伏見宮、有栖川宮などの皇族にも寄付を依頼、各宮家より一千円の応募を得た。

新潟は、市島の出身地でもあり、知友も多いことから力の入れ方も違っていた。七月初旬から館員の小林堅三を派遣し準備活動に入ると同時に、大隈の親書を地元の有力者に出したりする。市島は、高田学長、吉田東伍らと約二週間余にわたり県内各地でキャンペーン活動を展開した。

その他、愛知・静岡の校友会に出席（九月）したり、精力的な活動をしている。

一一月二七日に「本日募集金、下賜金を包含し十五万円に達す」と記している。皇室よりの下賜金は三万円であった。医科新設を含めての計画全体の予算規模は、一五〇万円であった。半歳にしてその一割に達した訳である。

医科新設計画の顚末は前回触れたとおり、見送りとなる。一〇月一〇日の項に、「田代亮介来訪、同仁会之前途を云々し、早稲田医学部と合同の事に及ぶ」と市島は記している。田代は、市島のかかりつけの医師、同仁会は、当時大隈を会長に戴いていた中国等東アジアの医療に貢献する目的の財団で、病院と留学生対象の医薬学校を経営していた。田代とのこの談話は、学苑の医学部構想に、この同仁会が視野に入っていたことを指している。

なお理工科再興の恩人竹内明太郎は、この年九月に理工科商議員に就任した。

学苑の図書館の全蔵書数が、六月末で一一万冊に達した記念に、一〇万冊達成の前年にならい、吉田半迂に「戊申七月図書十一万巻」という六センチ余の方印を作らせた。これは前年作った「丁未十月図書十万巻」（五世・浜村蔵六刻）の印とともに現在富岡美術館のコレクションに納っている。

図書館協会々長として、この年一一月二二日から南葵文庫などを会場とし年次大会を開催、会務報告などをおこなった。翌日には、懇談会のため慶応義塾を訪れるが、意外なことに市島の慶応訪問はこれが初めてだったと記している。この大会で、協会は、全国的標準目録法の確立、各地の貴重書のリストアップ、図書館新設の基準の設定の三項目を文部省に働きかけることを決議し、一二月に、文部次官に請願した。市島は、図書館大会を早期に関西にて開催したいという意図を示していたが、大会後和田万吉から「関西図書館叛跡の報」を受けとった。

公務についてもう一件触れておこう。九月のはじめ、市島は「早稲田学報」「早稲田文学」「外交時報」という学苑に関係する三誌を合同し、一大雑誌として改革したい希望を抱いていた。このことに関して、高田、坪内逍遙、島村

抱月らと頻繁に協議を繰り返しているが、結局「早稲田学報」を校友会に移すということで結着する。

さて、多忙を極む中、市島は趣味である書簡や印の蒐集に務めている。名家書簡をこの時期だけで、二〇巻以上表装している。近年、古書店などに市島春城蒐集名家書簡といった類の巻子を時々見かけるが、こうして蒐められたものの一部であろう。自ら蒐集した書簡を中心とした「消息展覧会」を一一月六日から開催している。「馬琴六十年忌辰遺著展覧会」との合同開催であったが、世間の評判は上々で、市島は連日対応に追われ、一時は札止めが出る程の盛況であった。一〇月には、幸田露伴、林若樹、安田善次郎らの趣味の会である「欣賞会」に参加した。一一月下旬には、前島密を囲む会「白眼会」を発足させる。公私共に多忙の中、市島にとって、長男、二男の病弱、亡弟の家庭の問題が気懸りであった。

春城市島謙吉が、昭和一九年四月二一日に八五歳の長寿をもって他界してから、今年は五〇年目にあたる。彼は、学苑と日本の図書館界の発展に、大きな貢献をし、さらに一人の文人としても独自の境地を開き、多くの随筆を物した。

我々は、一〇年前に当時の図書館長であった濱田泰三先生のご助言を受けて「春城日誌研究会」を発足させて以来、市島の遺した日記を中心に、その足跡を辿ることに努めている。

没後五〇年という記念の年に、研究会発足一〇年を省みると同時に、図書館の主催で「市島春城展 ― 没後五〇年記念」を来る一一月に開催する機会を持つことができたことは望外の喜びである。また、会員の渡部輝子（元図書館員）によって図書館の広報誌である『ふみくら』誌上に、春城への思いと、研究会の有様が寄稿された。

研究会の目標とした、市島の館長時代、明治三五年から大正六年までの日誌の翻刻は、漸く道半ばに至ろうとしている。関係諸兄姉の協力を得つつ、継続は力なりをモットーとし、今後も努めて行きたいと意を固めている。

（担当　金子宏二、酒井清、藤原秀之、渡部輝子）

――一九九四・一〇・一

春城日誌

明治四十一年
六月一日以降

特
イ4
1919
550

※六月分は前号掲載

七月

一日

雨。朝来、新潟県各方面へ長文の書簡を認め差出す。基金募集之為十五日頃より出張ニ付其の打合の為也。坂本嘉治馬へ約手、利子添遣す。鴻池銀行より、千五百円借入之手形也。期限八月廿四日也。昆田ニ書を投す。西条より人来り、北堂より茶を贈らる。高木骨董店を訪ふ。故三條公の書牘を贈らる。不」(一七ウ)在中落後生来訪。晩間、昆田文二郎来訪。越後ニ於ける募集の件を協議して去る。象山書翰ニ関して、宮本仲の書ニ接す。

二日

雨。学長を訪ふて越後募集の件ニ付打合を為す。登館事務を見る。小林堅三に越後行を命す。募集用に関す。午時大隈伯邸ニ新清国公使伊集院兼常招宴ニ付」(一八オ)席ニ陪す。三時より同邸ニ学校の評議員会を開き、夜に入り散会。和田万吉の書ニ接す。不在中、旗野如水、田代亮介来訪。半迂ニ嘱したる校印の刻成る。

三日

漸く晴。瑜珈理円(大石)一身上の事ニ付来訪。小林堅三、越後へ出発ニ付来訪。広田金松骨董を齎らし来り示す。午後より下谷ニ英堂を」(一八ウ)訪ふて薄暮帰宅。市役所より大隈伯演説稿を校正をもとむる為送り来る。先年借入金の事ニ関し、牧口義矩の書来る。米光関月来訪、探検世界の材料をもとむ、二三を口授す。

四日

雨。山田清作来り刊行会の事を云々す。大隈伯国府津別

邸新築落成ニ付、十五日座敷開きの案内状来る。書簡を整理して表具屋へ装潢を托す、其数三巻。登館」(一九オ)事務を処す。広井一より越後校友会之件ニ付来信あり。随筆をものして半日雨窓の悶を遣る。宮原正喬ニ答ふ。小林堅三、明朝越後へ出発ニ付、上野喜永次、松木弘ニ添書を付す。

五日　日曜

雨。京都の宮原正喬来訪。踵て佐藤民三郎来訪、物を贈らる。片山尚絅（朝川善庵孫）大隈信常紹介にて来訪。片山兼山、朝川善庵遺書出版」(一九ウ)之事を云々す。桑田春風、消息展覧会之件ニ付来訪。本日、午後三時より、早稲田大学ニ於て第廿五回卒業式を挙く。卒業生総数七百七十七名。外ニ百二十余名の清国留学生の卒業セるものあり。式は別ニ十二日挙る筈。大江乙、和泉文、昆田細君等来る。足利学校維持策一篇を稿して、江森泰吉ニ投す。」(二〇オ)

六日

曇。宮原正喬之書ニ接す。森長徽（文明協会員）来訪。高田を訪ふて話す。午後、旗野如水、江部妻来る。田原来訪ニ付同伴、紅葉館ニ開会之校友会ニ臨席す。坂口仁一郎より、電信為替到達。新潟行ニ関し松井郡治の書ニ接す。

七日

晴。高田、校友岡田耀賢ニ書を投す。」(二〇ウ)松井郡治ニ答ふ。明後日直治のため、小宴を伊予紋ニ催すニ付、直治、昆田、富田精策（当時出京中）江部に案内状を発す。坂口五峰ニ書を与ふ。又朝倉亀三に書を投す。鳥居大路より来書あり、直ニ答ふ。登校、新潟県出張之事を処す。債券三百円担保ニ差入、出版部より金弐百円借入。午時長岡の渡辺藤吉、高山喜代造と共ニ大隈伯を訪ふて、午餐の饗を受け、」(二一オ)渡辺ニ寄付の勧誘を為し、又長岡方面募集之事を依頼す。来十三日、図書館協会を開くの件ニ付、帝国大学図書館と交渉をなす。午後英堂ニ会す。高田の清水広博より同地図書館設立の事を報じ来る。

八日

晴。新潟の桜井市作を西河岸の島屋ニ訪ふて新潟に於け

る学校の」(二二ウ)基金募集を托す。刊行会ニ至り、事務を見る。越後へ遣したる小林堅三より柏崎、長岡両地校友と募集の件ニ付、打合の結果を詳報し来る。両地共ニ準備好都合也。

九日

晴。朝倉無声より、新著日本古刻書史三巻を示さる。相沢敏太郎、小林堅三に書を投す。江部淳夫、昨年雲南より齎らし来れる桃源産」(二三オ)の紫玉印、半迂ニ刻を依頼し置きし処、本日刻成る。文云、今世何世。本田信教来訪。吉田洛城ニ簡し、今夕の会ニ案内す。午後、文求堂を訪ひ、若干の書を購ふ。四時より賀田直治、富田精策、吉田東伍、昆田文二郎、江部淳夫を伊予紋ニ招飲す。小林堅三、相沢敏太郎の書ニ接す。児美津、発熱通宵解熱を得す。」(二三ウ)

十日

雨。山田清作来る。井上辰九郎妻の訃ニ接す。登館事務を処す。富田精策、図書館縦覧之為来る。新潟県出張ニ関する事務を処す。大隈伯親展書を越後の富豪ニ与ふ。増子と村上校友会之事を協議す。半迂ニ托したる「越女一笑三年留」の印癸刀。増田義一、佐藤伊三郎ニ書を与ふ。大江乙亥門来訪。踵て江部淳夫来る。疲労を感じ閑」(二三オ)臥。無声近著日本古刻書史を読む。

十一日

晴。学長を訪ふて新潟県出張之件ニ付協議す。目下鶴見ニ在留之宗家主人ニ書状を発す。刊行会ニ至り編輯部員の点陟をなし、手当を与ふること例年の如し。相沢、林と話して、午後帰宅。在越後の建部遯吾の書ニ接す。又小林堅三より、北蒲原郡校友会準」(二三ウ)備の模様を詳報し来る。高田の岡田耀賢より返翰来る。不在中高田半峰、足利子爵来訪あり。明後、図書館協会開会ニ付、加藤、和泉打合之為来る。半迂ニ命鐫の図書館記念印刻成る。文云「戊申七月図書十一万巻」。前田医師来り、児を診す。夜に入り昆田文二郎、新潟県募集之件ニ付来話。

十二日

晴。賀田直治、親戚市島慎次郎を伴」(二四オ)ひ来り物を贈らる。石渡敏一来訪。朝倉無声来訪。続燕石十種の材料

を齎らし来り示さる。大石理円一身上之事ニ付来訪。広田金松、吉田半迂来訪、半日接客ニ忙殺セらる。午後より井上辰九郎妻葬式ニ付、青山斎場へゆく。中島半次郎、支那より帰朝、写真を贈らる。佐藤伊三郎、兄弟の間に葛藤あり。今日、和解を為す両人を迎へて対談セしむ。夜に入る迄かかり、漸く」(二四ウ)和解す。田代亮介、下林貞雄来訪。晩間驟雨あり。雷鳴轟く。児通宵発熱あり、天明迄持続す。

十三日

晴。朝餐後英堂を訪ふ。午後より一ツ橋学士会に於て図書館協会の臨時会を開き、会員、椹斎、正斎、篁墩、迷庵其他図書研究、諸名家の著書遺墨を持寄り、評論」(二五オ)研究ニ半日を消す。在北京日本公使館、西田畊一より図書購入之件ニ関し来書あり。大江乙亥門一身上之事ニ付来話。早稲田文庫蔵書十一万巻ニ達したる記念として、半迂の刻印を捺セるはかき数葉、知友ニ発す。不在中、羽田智証、松井郡治来訪。

十四日

早朝より中山速男、御橋悳吉、山田清作、吉田東伍、阿部蘇春、三恵五江、」(二五ウ)加藤万作、交々来訪。半日接客の為めに消す。小林堅三、桜井市作の書ニ接す。三恵五江より陶製の肉池を贈らる。又、落後生より世阿弥申楽談儀印刷成るとて一本を贈らる。午後直治来訪、又、高田半峰来話。田端(アキママ)吉、室孝吉来訪。田代亮介より内子の方刻を送り来る。

十五日

建部遯吾、広井一、小林堅三ニ書を投」(二六オ)す。今朝宗家主人を鶴見生麦の別荘に訪ふて、越後行ニ付云々の依頼を為す。午後、大隈伯を国府津の別荘に訪ふ。伯の別荘、近日竣工を告げ、けふは村人を会して披露の日也。いろ〳〵の馳走を受け、坪内其他の同人と五時四十分の汽車にて帰へる。増田義一、青柳篤恒等の書翰ニ接す。夜来大雨あり。本日鶴見より国府津ニ至らんとし、汽車を待つこと多時、無聊ニ堪へず。初」(二六ウ)めて俳句四五首をひねり坪内ニ示す。拙悪、録するに足るものなし。

十六日

雨。朝来、赤堀又次郎、林縫之助、斎藤泰三、黒川真道、昆田文二郎、羽田智証、本田信教交々来訪、半日接客ニ忙殺セらる。半迂午後来話。相沢より金百円領収。弘文館より、国史辞典を贈らる。佐藤伊三郎来訪、物を贈らる。増子喜一郎来訪。村」(二七オ)上の会ニ付協議して去る。終日学校と文書の往復をなし、繁忙甚し。

十七日

広田より天正検地帳、小水麿貞観経を購ふ。加藤万作を招きアルバム編纂の事を云々す。池畔ニ英堂ニ見ゆ。増子、佐藤伊助を伴ひ来る。村上会の打合を為す。今夜十時汽車にて高田、吉田と共ニ越後行を啓く。増田、昆田、江部、学校職員見送りの人多し。越後地ニ入り、校友の長岡ニ赴かんとて乗り込む者多し。」(二七ウ)

十八日

十二時半、長岡着。大野屋ニ投す。校友の来り接するもの相踵く。今夜、常磐楼ニ於て、新潟県校友大会ニ臨む。出席者四十五名、学長の寄付勧誘演説ニ次ぎ、余も一場の演説を為す。校友中より募集委員若干名を指名し、夜更ふして旅宿ニ帰へる。」(二八オ)

十九日

漸く快晴。長岡ニ在り。各地の校友を一室ニ会し、余主任となり募集事務の打合を為し、頗る繁劇を極む。午後より長盛座ニ講演会を開く。聴衆満堂、余も一時間ニ余る演説を為す(私立大学の経営ニ就て)。余の演説中、学長市内の有力者を訪問す。夕刻より長岡館の勧迎会ニ臨む。七十名の出席あり。町田忠治の郵書到る。今夜通宵眠を得す。炎熱のため床上ニ煩悶す。」(二八ウ)

念日

晴、長岡に在り。広井同行、大塚伝三郎を片貝ニ訪ひ、同人を誘ふて西脇済三郎を小千谷ニ訪ふて、寄付金の事を云々す。要領を得す。更らに高橋九郎を旭ヶ岡ニ訪ふて話す。石塚三郎も来り会し、数時間風景を賞し、薄暮長岡ニ帰へる。今夜、長岡銀行積善会ニ招かれ、一行三人代る〳〵一場の演説をなし、十一時旅館大野屋ニかへる。炎熱甚しく疲労を感じたり。」(二九オ)

念一日

今朝深井康邦来訪。八時三十分長岡を発し、十一時新津ニ下車、佐藤辰衛其他出迎の人々と共ニ天王ニ向ひ宗家ニ立寄り、昼餐の饗を受け、新発田より差向けたる馬車にて、芝田ニ入る。丹呉翁来訪。明日先考の墓を建てる旨を云々セらる。今夜北辰館ニ校友大会あり、三十余名出席。余、学長と共ニ一場の演説を為す。十二時旅宿長谷川ニ帰へり臥す。河内広次郎の書到る。」(二九ウ)

廿二日

少雨。早起、書状を認め東京宅、山田清作、英堂方ニ発す。国井伴之丞代人某、清水郡長、町長、真島信城、長場龍吉郎、田辺久蔵、伊藤三之介、武藤郡四郎等の故(ママ)人相踵て到り応接に暇あらず。午前十時、五十公野ニ抵り、数刻前丹呉翁の斡旋により建られたる、先考の墓を拝す。浄念寺に明栄と話して、芝田ニ帰へる。高橋義彦来訪ニ付、印話を為。義彦、小田島彦太郎」(三〇オ)を余に紹介す。同人より丹羽伯虎の私印(島津圭斎刻)并ニ呉浚明自刻印(文に云衣錦尚絅)を贈らる。午後一時、旭座に講演会を開く。聴衆堂に溢れ頗る盛況。夕刻より高橋館に懇親会を開く。会するもの百五十名、各派、各色の人来る。余、教育のため漸く党派の別を棄て、多衆の会合を見たるを喜び、為めに一場の演説を為す。席上会衆の需ニ応じ、数十本の扇面ニ揮毫す。半夜下利(ママ)あり。」(三〇ウ)

二十三日

晴。新発田に在り。朝来、来客相踵ぐ。上野喜永次を東道とし、学長と共ニ二宮孝順を蓮野村ニ訪ふ。巡回の趣旨を云々す。午餐の饗を受け其の庭園を見る。弁天湖は、庭中のものとなり一種得易からさる好風景也。一旦芝田ニ帰へり、更らに結束して西条ニ向け発す。途次、金子、白勢長衛ニ立寄り文三郎、正員、友弥ニ会し寄付の勧誘をなし、六時、西条の縁家丹呉家ニ投ず。上」(三一オ)山辰(ママ)麿、相馬、丹呉分家来話。燭を剪って幼少時代の事を語り、刻の移るを知らす。需に応じ、扇面等の揮毫を為す。岩船郡より電報来る。直ニ答ふ。昨日来の下利(ママ)、収まらず。特ニ粥の注文をなして、晩餐をしたたむ。丹呉翁、数点の書画を出し示さる。

上山は余か始めて手習を教ハリし、法印の息にて、今

は小学校長なり。此度中条ニ会を開く発起人たり。此人余より六七才若し。色々の旧夢談」(三一ウ)出たる内、余か常山紀談の一節を漢訳セし稿を、今尚蔵すと云へり。今夜始めて旅館を離れ、一夜静養を得たり。

二十四日

晴。五時起床、北堂を庵室ニ訪ひ、家事を話して別を告け、又、丹呉老人ニ寄付金を請うて其の一諾を得。人の需ニ応じ、扇面十数本揮毫す。国井恒太郎、迎のために西条迄来る。九時別を告けて発す。途次、羽ヶ□国井元三郎の居を訪ひ、寄付の事を云々し、去つて」(三二オ)村上ニ向ふ。十二時同地ニ着、赤坂屋ニ投す。増子と募集上の打合をなす。校友、頻々来り接す。内子幷ニ英堂ニ書を与ふ。相沢敏太郎ニ発電、事を托す。午後より経応寺ニ於て、講演をなし、一行の演説五時間に渉る。六時過、吉沢楼ニ有志懇親会あり。余、席上増子喜一郎を来衆ニ紹介し、岩船の名物、ひとり織物と鮭のみにあらす、よろしく増子を加ふべしと吹聴す。」(三二ウ)

二十五日

朝来、雷鳴絶雨あり。二三時間にして晴る。佐藤伊助、百武、青山等来訪あり。午後二時、佐藤、海沼、板垣、百武等数名の有志者を朝野屋ニ招き、募集ニ関する方法を決す。高田病のため宿ニ臥し、余、増子と共ニ専ら周旋す。余、吉沢と旧あるを以て、帰路立寄り需に応じ、扁額を揮毫す。曰く石舟第一楼。昨日来、下利(ママ)已まず、一物を食ふ能ハず。旅宿にか」(三三オ)へりコンニャクを抱えて眠る。

本日、藤山茂実（旧名銀太郎）来訪。曾て政治ニ奔走セし時代の苦心を語る。偶々理髪師、日ヶ谷某到る。これもと吉沢に在りしもの、余を崇拝すること甚しく、今に於ても変セす。余、贈るに物を以てし、亦藤山と語りつゝ髪を理セしむ。亦是れ漫遊中之一快也。児等幷ニ英堂ニ書を与ふ。」(三三ウ)

二十六日

村上にあり。今朝激雨あり。佐渡(ママ・藤)伊助、沢渡朝憲、板垣来訪あり。九時村上を辞す。佐藤等町はづれ迄見送りを為す。平林ニ至り車をかゆ。国井元三郎出迎ふ。十二時

中条ニ着、松月庵に投す。河内広次郎、細野、丹呉俊平、丹後直平等の訪問を受く。一時より広厳寺に於て講演会を開く。此地は臨時ニ催セし所なれとも、聴衆は堂に溢れたり。終つて松月庵楼上」(三四オ)懇親会を開き、学長の寄付金勧誘演説ニ次き、余、第二故園ニ対する旧談をなし、洛城亦郷土史を講す。二時辞し、車を馳セて新発田ニ赴く。長谷川に投す。新潟の電報并ニ家信ニ投す(ママ・接)。前日来の下利未収まらす。今夜亦コンニャクを抱えて眠る。

松月庵故主人は、余か明治八年初めて東京ニ遊学の折、案内者たりしもの。楼婦遺像を出し示して旧時を云々す。余、懐旧の情に堪す、為めに揮毫を為すを約す。」(三四ウ)

二十七日

新発田に在り。五時起床、英堂ニ与ふる書を裁し、又、人の需めに応し、十数紙揮毫、為めに二、三時間を費す。富田精策、上野喜永次、伊藤三之介、小田島彦太郎、土田、三田村、川田(楳吉)等、交々来訪、応接ニ忙殺セらる。上野より露人の炊粥釜一、樺太の土器一を贈らる。小林ニ事務上之打合をなし、又清水中四郎を訪ふて、十二時新発田を発す。途中、濁川真島を訪ふ。」(三五オ)偶々主人在り、寄付金の勧誘をなし、其一諾を得、舞して新潟に入る。火災後の新潟惨状を極め、幾んと見るに忍びさるものあり。篠田本店ニ投す。校友多く沼垂迄出迎ふ。四五の信書ニ接す。真島信城来訪あり。数日の奔走ニ一行半病人となり、今夜は静養と決し、人の招きにも応セす。早く寝ニ就く。夜来大雨あり。」(三五ウ)

二十八日

晴。早朝、学長と同伴、区内の有力者を訪問す。白勢春三、鍵富、斎藤、栗林、古閑、坂口、桜井等也。炎暑に堪へず、席を行形亭ニ移し、校友を会して、寄付額の決定をなさしむ。午後より五峰と共ニ長沢松雨の居を訪ふて骨董を観、長谷川嵐渓の粉本一括を購ふ。多くは、梅関所持の粉本を写したるものにて、中に梅関手写の横巻粉本一あり。共に珍」(三六オ)とするに足る。夕刻より南辺茶屋ニ校友会を開く。三十五、六名集会。一場の演説を為す。建部遯吾も、明日の講演会に臨まんとて来港。此

会ニ出席。五峰ニ招かれ別席ニ晩餐の饗を受く。山田穀城を招き、弘文館出版国史辞典の紹介を托す。昆田、坪谷、林縫之助ニ郵信を発す。

廿九日

晴。朝来炎熱殊に甚しきを覚ふ。」(三六ウ)早朝物を齎らして、栗林を訪ふて話す。吉田信吉、小出喜七郎、其他校友十数名、続々来る。二三の信書ニ接す。半迂より近刻の印を贈らる。又、長沢松雨より、嵐溪の尺牘を贈らる。外ニ梅関、逸雲等の書牘を購ふ。桜井市作と募集の件ニ付話す。午後、改良座ニ講演会を開き、夕刻より行形亭ニ懇親会を開く。市内有力者九十名出席。多く故旧ニ会す。懇親会後、五峰ニ招かれ、別席ニ晩餐の饗を受く。」(三七オ)

三十日

晴。新潟に在り。早朝斎藤庫造、松井郡治、松木弘を会し残務を処理す。又、並木覚太郎の偶々、日清保険会社の要件を帯ひ、滞在しあるを幸ひ、同人を留めて暫時募集の手伝をなさしむるに決す。岩船郡の渡辺三左衛門、偶々新潟ニ在り。其の訪問を受け、寄付の勧誘をなす。正午発汽車にて新潟を発し長岡ニ向ふ。偶々五峰の急行、東京ニ赴くに会し同車す。栗林、桜井、」(三七ウ)其他校友、有志者数十名停車場迄見送ニ来る。栗林より嵐溪の粉本二巻を借る。二時二十分長岡着、校友の出迎ふもの群をなす。石塚来り渋温泉ニ避暑中の機、病の為、石塚方へ来り居るよしを報す。金円を石塚ニ托す。増子并ニ並木ニ小包を発す。旅舎大野屋、炎熱甚しく長岡館ニ至り涼を納る。石塚、広井を招き晩餐を与にす。本日、長岡ニ一泊セしは、同所の残務を処理セん為め也。」(三八オ)

三十一日

晴。二番汽車にて長岡を辞し柏崎ニ向ふ。車中、山口達太郎ニ会す。柏崎ニ着、校友、有志者、数十名出て迎ふ。直に天京支店ニ投す。此地、長岡方面ニ比すれば大いに冷気を感し、初めて爽快を覚ふ。関栄太郎来訪、物を贈らる。英堂の書ニ接す。直ニ答ふ。山口達太郎と話す。一千円寄付を諾す。内藤久寛不在なれとも同断、壱千円寄付の申出あり。午後、妙行寺ニ講演会を開き、引つゝき阿部楼ニ於て」(三八ウ)有志懇親会あり、開会ニ先ち、四

五の富豪を会し、余より寄付の勧誘を為し要領を得たり。山田清作ニ発電、事を問ふ。夜に入り返信あり。又、人の需ニ応じ十数枚の揮毫を為す。

八月

一日

柏崎滞在。五時起。小林堅二、並木覚太郎、増子喜一郎、広井一ニ長文の書」(三九オ)簡を発す。皆寄付金募集之事ニ関す。半日、人の為めに揮毫す。小崎懋、山賀新一郎、吉田守衛交々来る。又東京より帰県の途次、五峰立寄る。小崎ニ招かれ、五峰と共ニ阿部楼ニ午餐を喫す。又、土地の有志者ニ招かれ豊邱寮ニ抵る。中条松月庵ニ紀念のため額面を認め投郵。坪谷善四郎の書到る。

二日

晴。今朝一番汽車にて五峰新潟へかへる。又、人の需ニ応、額面を揮毫す。九時四」(三九ウ)十五分の汽車にて、柏崎を辞し高田へ赴く。増田義一外高田校友会数十名出迎ふ。直ニ柳糸郷ニ投す。又、下利一次。会津八一の書ニ接す。太田孫次右衛門、高橋文質、山岸粂太郎来訪。其の招きを受け、一行并ニ増田義一と共ニ長養館ニ於て晩餐の饗を受け、深更柳糸郷ニ帰へる。

三日

晴。今朝高田学長、保坂潤治を津有村ニ訪問す。余留まって雑務を処す。在村上の」(四〇オ)増子喜一郎ニ電信為替を投す。金子伊太郎、丸山新十郎、保坂潤治其他有志者頻々として来訪あり。十一時より柳糸郷楼上ニ於て校友会開会。二十余名出席。余、席上演説を為す。直ニ寄付額を定めたるもの五六名あり。午後一時より大漁座ニ於て講演会を開く。出席者増田、吉田、余、高田の四名にて、余は一時間半ニ渉る長演説を為す。聴衆満堂盛況。散会後、柳糸郷ニ於て歓迎会あり。七十名出席と予算せしもの百七十八名ニ達し、会」(四〇ウ)主狼狽す。余又席上一場の演説を為す。十時宴会を辞し、又、四五の同人と小会を開く。小花と名(ママ)くる老校書相識ニ付、迎へて旧雨を語る。贈るに余の揮毫ニ係る額面を以てす。

四日

晴。朝来太田孫次右衛門、金子伊太郎、丸山新十郎外校友数名来訪。十時三十分汽車にて出発、帰京の途ニ就く。保坂潤治、倉石知蔵外校友十数名汽車」(四一オ)迄見送りに来る。炎熱昨日より甚しく、車中切りに座睡を催す。幸ニ同車中、緒方医学博士并ニ石原助手のあるあり。余等より後れて一日恙虫研究之為、越後保田へ出張し、今は帰京之途次也。車中恙虫研究の事など質問し、為めに半日を費やし益する所少からず。亦半日の無聊を慰するを得たり。十時半上野着、家人并ニ学校職員多く出て迎ふ。直ニ帰宅、一時寝ニ就く。」(四一ウ)

五日 小雨

山田清作、加藤万作、和泉信平、吉田半迂交々来話。午前中、不在中之事を整理す。午後より英堂を訪ふ。病気静養之ため芝浦に在り、来らす。帰宅後疲労を感じ閑臥す。校友小杉喜代蔵来話。佐藤正十郎の書ニ接す。昆田文次郎ニ書を投す。

六日

晴。田原栄、吉田半迂、昆田文二郎(ママ)、大木操交々来訪あり。半迂より自」(四二オ)製の陶印数顆を贈らる。新潟ニ於て獲る所の嵐渓粉本の整理を托す。佐々木義山の書ニ接す。半日旅中の日誌を手帳より写し取る。又旅中の計算書を作る。三時頃より雨あり、涼気を覚ふ。深更ニ至り激雨あり、風も又加はる。

七日

雨風。小久江成一、林縫之助、東儀季治、平野復道交々来訪。平野より篠田芥津の」(四二ウ)印譜一帙を贈らる。学長と学校に会して事を協議す。石塚三郎より機の病状を報し来る。午後より強雨あり。半峰来訪。半日家居、出張中之事務を整理す。昆田文二郎より北蒲募集之件ニ付、小林堅三の書を転送し来る。賀田直治の書ニ接す。内藤久寛を下宮比町宅ニ訪問し、刈羽郡募集之件を云々す。直治、文三晩間来訪。」(四三オ)

八日

晴。佐藤正十郎、山崎恒四郎一身上之事ニ付来話。吉田洛城、栗ノ池佐登志、阿部蘇春、鳥居大路代人交々来訪。越後巡回中之計算書、学校へ提出す。金高一千五十円也。

相沢、朝倉亀ニ書を与ふ。午後より閑臥、半日を消す。並木覚太郎より、新潟ニ於ける基金募集好況の趣を報じ来る。

九日

」(四三ウ)

晴。日曜。増子喜一郎、村上より帰へり募集の成蹟(ママ)を報す。昆田文次郎、矢野太郎、朝倉亀三、三恵五江、吉田半迂、本田信教交々来訪。午前中接客ニ忙殺セらる。腸胃の病、未回復せす。午後より閑臥、静養。在新発田小林堅三、在茅ケ崎高田学長ニ書を投す。朝倉亀三より村田了阿の遺稿三冊を購ふ。

十日

」(四四オ)

時々大雨あり。朝来田代亮介、辻川武之進、朝倉亀三、広田金松、栗山精一等交々来訪。午後より疲労之為打臥す。並木覚太郎、佐藤正十郎、石塚松籟より来書あり。高田半峰、小林堅三ニ書を投す。直治、近日台湾へ帰任ニ付、本日精養軒ニ晩餐を共にしたしと申来る、諾後往く。昆田も来会。九時帰宅。」(四四ウ)

十一日

快雨一過、清涼を覚ふ。吉田半迂ニ托したる「越人長家山水図」の朱文印成る。高田半峰、中野鉄平の書ニ接す。山田清作と往復す。越後地方の過日周旋を受けたる人々に謝状を送るに付、其人名調を為す。病未愈へす、半日床上ニあり。松籟ニ簡す。中野鉄平、国井元三郎、蓑輪亥三郎、増田義一ニ書を投す。昆田文次郎紹介にて、池田善三郎(越後稲荷岡の人)印度」(四五オ)史の訳稿を齎らし来り見す。山田、増子来話。瀬川光行より世界写真帳を贈らる。夜に入り激雨あり。払暁までつゞく。夜三時頃激震あり。在鯨波石塚宛、鑵詰数個小包郵便にて送る。

十二日

雨。高橋義彦より自刻の印を示さる。又半迂ニ蔵書印を刻せしむる事を托さる。越智修吉の書ニ接す。又烏竜茶を贈らる。並木覚太郎より新潟市募集の結果を報じ来る。午後池畔」(四五ウ)ニ英堂ニ会し、留守中大椿事ありしことを聞く。増田義一、小林儀三郎、中野鉄平、山田清作等の来書ニ接す。本日午後二時過強震あり。腸胃回復したるも、虫歯にて右頰腫れ心地勝れす。

十三日

雨霽。御橋慶吉、赤堀又次郎、吉田半迂、山田清作来訪。栗山精一に簡して基金事務を処す。高橋義彦ニ半」(四六オ)迂の印影をおくる。山岸粂太郎、高田早苗ニ書を投す。右頰の腫、未退かす。午後より閑臥。按摩を招き療治を為す。夜に入り小林堅三より募集ニ関する報告を接手す。

十四日

快晴。赤堀又次郎より絵はがき、新潟行形亭より薬を送り来る。前日来の歯痛、今日に至り益々甚しく、午時意を決して、駿河台之歯科医」(四六ウ)大原等太郎を訪ふて、其の治療を受け始めて爽快を覚ふ。直治妻、明日台湾の帰途ニ就く由にて来訪。吉田洛城、明朝帰国の趣にて来訪あり。歯を抜きたる結果、気分回復、半日紅霞山房瑣記を筆して夜に入る。山田清作の書到る。

十五日

晴。大江乙、桂湖村来訪。広井一、小林堅三、高山喜代蔵ニ郵書を発す。」(四七オ)鳥居大路ニ金四十円、年賦第二回之内へ納金。赤堀、増田の書ニ接す。相沢敏太郎来訪。弘文館の□金辞任之事を云々して去る。午後英堂ニ会す。中野鉄平の書ニ接す。四時頃大雨あり。本日賀田直治妻、台湾の帰程ニ上る。

十六日

晴。新発田出先より大木操の書状来る。児機、長岡より病状を報じ来る。弘文館ニ簡し、金百円受取。高田半峰ニ書を投す。機病気ニ関し、石塚三」(四七ウ)郎へ依頼状を発す。桑田春風より来簡あり。田代亮介より同断。深更より大雨到り、天明迄雷鳴とゝろく。

十七日

晴。例年暑中、小児を伴ふて何れかに遊ぶか例也。本年も小児ニ促され、日光行を決し今朝八時、昂、久、澄、盈を伴ふて上野を発す。直通汽車にて乗換の不便なく、二時日光着。偶々驟雨到り人車揃はす、はなれ〳〵に小西別館に」(四八オ)投し、三階ニ陣を取る。宮参拝明日ニ譲り、市中を散歩し数通の絵はがきを東京へ発す。夜に入り雷雨甚しく、電光閃々白昼の如し。冷気秋ニ似て、フランネルの単衣を着すも凌き兼ぬる思を為セり。

日光の宿で子供達（左から、ヒサ、スミ、昂、ミツ）とくつろぐ春城

十八日

天気清朗。七時小児引き連れ東照宮、大猷院廟隈なく参詣し、十時旅宿に帰へる。小供等大よろこび也。学校より電信」(四八ウ)為替来る。四五の絵はがきを知人ニ出す。山房瑣記四五枚を筆し、無事に苦しみ閑臥、華山小説を読む。四時近き頃より又驟雨到る。これこの山の常態。陰晴はかられざるは、夏時深山の特色とも云ふべき歟。

十九日

曇天。五時起床。児等を伴ふて散策。大日堂を経て含満淵を賞し、帰途おもちやなどを購ふて旅宿へかへる。山房瑣記」(四九オ)を筆す。早稲田大学并ニ山田清作より電信為替を領掌す。和泉文三より来書あり。十五日台湾鉄道へ転勤の辞令を受けたる旨を報じ来る。午後二時半日光出発、直通汽車にて八時上野ニ着。不在中高田半峰、中村進午、黒川真道、堀田璋左右、丹呉忠太郎、宮原正喬等の来信ニ接す。宗家より物を贈らる。

二十日

」(四九ウ)

朝来留主中之処を処す。広井一、小林堅三、北堂の書ニ

接す。佐藤正十郎、牧野謙次郎来話。基金募集之件ニ関し佐藤伊左衛門、内藤久寛、桑山直二郎、高田学長ニ郵書を発す。早川純三郎来話。昆田文次郎又踵て来る。

二十一日

晴。朝来並木覚太郎、宮原正喬、斎藤恭蔵(校友)、山崎恒四郎、下林貞」(五〇オ)雄、山田清作交々来り応接ニ半日を消す。石塚三郎、機の病状を云々し来る。西景丸より発したる直治の書ニ接す。水谷弓彦来訪。大博覧会の協賛員となるべき旨勧誘状来る。午後上野ニ散策し、常盤華壇ニ晩餐を喫す。

廿二日

晴。逍遙を訪ふて半日縦談す。山崎恒四郎、新潟商業銀行へ傭はるゝ事ニなり」(五〇ウ)来訪。午後英堂を訪ふ。文三不日台湾へ赴任ニ付、来訪。三好退蔵の訃到る。

廿三日

晴、風。小林堅三、下林貞雄ニ書を投す。佐藤善長の訃ニ接す。国書刊行会ニ至り事務を見る。弘文館の林ニ館之前途ニ就き忠告する所あり。重野安繹、石塚三郎の書ニ接す。文三夫婦、近日台湾へ赴くニ付、来」(五一オ)り訪ふ。三恵五江の書ニ接す。不在中高田早苗来訪。文三渡台ニ付、大島長官、賀田父子、越智修吉へ書状を交付す。萩野由之来訪。佐藤伊三郎の返書ニ接す。高橋橿堂より近刻の印影を贈り来る。

廿四日

雨。佐藤正十郎、赤堀又次郎、林縫之助、早川純三郎来訪。早川、林同伴、大隈伯を訪ふて来月八日、佐々木高美追悼会ニ出席、一場の演説を請ふ。半」(五一ウ)日、名家書簡を整理す。池田善三郎、川上淳一郎より来書あり。半峯、半迂より絵はがき来る。和泉信平、帰県中之処帰京。田中唯一郎来話。

廿五日

雨。阿部蘇春、吉田半迂の書ニ接す。山崎恒四郎、新潟商業銀行へ赴くニ付、斎藤庫造宛書状を交付す。坂本嘉治馬、坪内逍遙ニ郵書を発す。山田清」(五二オ)作来話。相沢敏太郎を蛎殻町宅ニ訪ふて、弘文館の前途を談ず。夜ニ入り池田竜一来話。明日和泉文三台湾の行を啓くにつ

き、兄弟四人来り会す。青木維三郎の書ニ接す。文三に旅費五十円貸付、餞別二十円、女帯一遣す。

廿六日

雨。広田金松より俳諧師書簡二十余通を購ふ。増子喜一郎来訪。梅」(五二ウ)沢利軒来話。日光ニ付ての所感を口授筆記セしむ。美術評論の材料ニ充てん為也。留萌石塚兵吾より昆布を贈らる。午後より出版部ニ至り、小久江、種村と事を話す。又伊藤正を大学ニ訪ふて、会計上之事務を協議す。文三夫婦、午前十一時の汽車にて台湾へ出発、内子見送を為す。

廿七日

」(五三オ)

晴。佐藤民三郎より長簡到る。自身学業之事ニ関す。山田清作、吉田半迂来る。半迂ニ命じたる陶印之刻成る。学校より金百円受取。斎藤音作ニ関する件ニ付、羽田智証より来書あり。午後池畔ニ英堂ニ会し、夜に入り帰へる。刊行会月末問題につき、山田清作の来書ニ接す。

廿八日

曇天、後雨。月末会之会計ニ付、相沢ニ」(五三ウ)書を投ず。高木骨董店を訪ふて探幽の粉本十六羅漢二幅、外仏像一幅を購う。十時の汽車にて高田半峰を茅ヶ崎の出先ニ訪ふ。十二時着。高田の居は土方伯別荘清風荘なり。夜に入る迄学校の重要事件ニ付協議し、基金募集の打合を為す。余大隈信常ニ代り基金部長となり、専ら事務ニ当る事ニ内決す。十時寝ニ就く。」(五四オ)

廿九日

晴。今朝十時、半峰ニ別を告げ帰京。弘文館ニ立寄り帰宅。午後萩野由之の書簡ニ接し、直ニ訪問。他より売りに来れる書簡（老女村岡、川路聖謨、山口素絢、蒼虬、月僊、岩倉具視）等の書簡を購ふ。晩餐の饗を受け、放談九時頃帰宅。相沢より弘文館辞退云々の書状到る。

三十日

」(五四ウ)

晴。廿八日馬関着の報、和泉文三より来る。在京城薄田貞敬より近著ヨボ記、大槻如電より寧静閣第三第四集、磐渓志略、金蘭遺臭を贈り来る。山田清作、刊行会月末始末の件ニ付来訪。信平を招き図書館之事を処す。佐藤伊三郎来話。踵て赤堀又、大木操、吉田半迂来訪あり。

名家書簡を整理す。又書翰縁起を筆し全日家居。羽田智証、萩野由之、石沢兵吾、高木」(五五オ)弘等ニ書を投す。

三十一日

曇、冷。半迂ニ托したる私印二顆、奚刀齋らし来る。小林堅三帰京、募集の状況を報告して去る。江部淳夫来訪、一身上の事を云々す。刊行会月末勘定、弘文館マゴツキを生じ、勧業債券五百円差入、当座増田義一より四百円借入る。坂本嘉治馬、坪内逍遙、大槻如電ニ書を投す。」(五五ウ)

九月

一日

二百十日ニ当る。天気平穏。今朝、機長岡より帰着。新潟商業銀行ニ赴きたる山崎恒四郎の書到る。佐藤正十郎、兄弟間の問題につき来話。平松遮那一郎の郵信に接す。来る六日浜松に開」(五六オ)会の四県校友会ニ臨席すべき旨学校より書状を領す。坪内逍遙を訪ふて、出版部のため一大著作を勧め、又、早稲田文学、早稲田学報、外交時報の三雑誌を合同して一大雑誌を作り、大学の機関となさんことを説き、坪内の同意を得て夜に入り帰宅。本日、和泉信平、昂の学業の件ニ付逗子の大成中学ニ到り夜に入り帰宅。萩野由之の返簡を得。午後より降雨、風な」(五六ウ)し。

二日

曇、冷。瀬戸介爾、佐藤正十郎、山田清作、吉田半迂、落後生、大江乙亥門交々来訪。登校、学長と共ニ基金事務を処し午後三時帰宅。山本悌二郎の書ニ接す。萩野由之来訪。夜に入る迄手簡を品評して去る。菊池晩香より近著談欄第二巻を贈らる。」(五七オ)

三日

雨。山田清作刊行会之件ニ付、早川純三郎、佐々木高美追悼会之件ニ付来訪。種村、加藤、半迂を招き、学校アルバム意匠ニ付協議す。登校、学長と共ニ昨日ニ引続き基金募集の名簿調査を為す。図書館事務を見て帰宅。晩間大江乙来訪。相沢敏太郎の書ニ接す。」(五七ウ)

四日

大雨。早朝、坂本嘉治馬を訪ふて二三要件を話す。高木骨董店を訪ふて半日を消す。午後より池畔ニ英堂ニ会す。佐藤正十郎要求之件ニ付、伊三郎ニ長簡を郵送す。夜に入り帰宅。古川二郎来訪、物を贈らる。

五日

曇。佐藤正十郎来る。川崎恒四郎」(五八オ)ニ銀行差入之証状を郵送す。高木弘ニ弧村遺愛之風呂并ニ釜返却。新潟市、再度大火の報ニ接す。北堂之書ニ接す。東京建物会社天津支店ニ在勤之岡山同窓会員豊島梅吉、兇賊之為重傷を負ひ死去の報あり。寺田弘、古文書を齎らし来り示さる。久須美秀三郎之書ニ接す。直ニ答ふ。半迂ニ命したる高橋義彦依頼之印来る。直ニ郵送す。登校事務を処す。亡」(五八ウ)弟一週忌ニ付、内子四谷へ赴く。今夜九時、伊藤重次郎(学校之留学生)外国より帰朝ニ付、新橋ニ出迎ふ。今夜十一時、高田学長と共ニ静岡県へ出発之約あり。伊藤を迎へて後、尚若干の時間を剰すニ付、日清生命保険会社にて時間を移し、予期の如く出発。一行、余、高田の外、校友江森恭吉随行す。寝台を買って臥す。終夜安眠を得す。」(五九オ)

(五九ウ　六〇オ　白紙)

六日

曇天、冷気甚し。静岡より森田勇次郎乗り込む。今朝七時、浜松ニ下車。多数の校友ニ迎へられて楽器製造会社の工場を見る。山葉寅楠の経営する所也。更らに汽車ニ投し、舞坂の弁天島に到り、茗荷屋ニ投す。此辺、近時海水浴場を設け、旅館、旗亭之新設ニ係るもの多し、翠松白沙の風光舞子辺ニ似たり。愛知静岡二県の校友十数名来会」(六〇ウ)あり。午後一時半校友と共ニ艇を湖水ニ泛べて東行、館山寺ニ抵る。此辺風光極めてよし。殊に館山寺付近、赤岩青波を砕き、老松蹇偃たる状、得も云ハれぬ趣あり。寺に入り会を開く。余、学長と共ニ一場の談話を為す。終って屋後の山を攀ち、眺望尤も佳なる処ニ席を開き、宴を張る。偶々漁師眼下に網を張る。銀鱗潑溂躍って網を脱す。衆快と呼ぶ。薄暮又艇ニ」(六一オ)投

し家ニ入り、茗荷屋ニ帰へり此家ニ泊す。四五の絵はかきを東京へ発す。

七日

今朝八時十二分発予定之処、汽車故障あり、一時間余遅着につき、旅宿を発し付近の勝を探り、十時少し前、漸く発す。高田学長、大隈伯の代理として、井上侯の重患を見舞ハんため、侯の別荘所在地、興津ニ下車。偶々本野一郎」(六一ウ)(露公使)ニ会す。これも井侯を見舞って帰へりかげ(ママ)也。井侯両三日は尚持堪ゆべしとなり。一時過る頃乗車、偶々山県侯、江木冷灰等の井侯を見舞って帰京の途ニ就くと落合、同車して夜八時半帰京。金六亭ニ晩餐を与にして帰宅。萩野由之、小崎懋、賀田直治等の郵書ニ接す。

八日

連日之低気圧、漸く去る。半迂ニ命」(六二オ)したる黄楊印子母の内、鐘林文の二面成る。佐藤正十郎、広田金松来る。登校、図書館事務を処し又基金事務を見、三時より華族会館ニ開会す故佐々木高美(佐々木伯男)の追悼会ニ臨む。此会は弘文館之編纂セる国史辞典の故高美の創意ニよる関係より、此度完成ニ付、故人の追悼を兼辞典の披露を為さんと欲する也。此脚本の作者は実は余也。来会者百五十名、小村、岡部、小」(六二ウ)松原三大臣、黒田侯父子等、有力者多く来り会す。神式の祭をなしたる後、千頭清臣の開会の挨拶あり。佐々木老伯の答礼あり。末松子、三宅雄、谷子、湯本武比古等の演説あり。晩餐を与にして散会す。

九日

晴。萩野由之ニ書を投す。坪井九馬三の書ニ接す。山田清作、朝倉亀三来訪。江部淳夫、蒲生妻を伴ふて来る。」(六三オ)宮原正喬父子来訪。早速整爾より芸備日々新聞七千号ニ投稿をもとめ来る。午後、赤堀又次郎来訪。陸軍幼年学校の書牘文栞を贈らる。相沢敏太郎来訪。刊行会の事等を話し、家蔵の書画を示す。

十日

晴。西化屋ニフロックコートの注文を為す。半迂来る。小林堅三、図書館之決算書を携へ来り見す。御橋悳」(六三ウ)

吉、市島亀吉等来訪。杉山三郎を訪ふて、学校商科の書翰練習を改善するに付、意見を陳ぶ。久須美秀三郎を矢来ニ訪ふ。不遇。並木覚太郎の書ニ接す。登校事務を処す。四時より高木骨董店ニ立寄り、更らに越後并ニ山形方面ニ基金募集ニ与りたる同人の慰労会（紅葉館）ニ臨み、十時帰宅。和泉文三より台湾安着の報あり。」（六四オ）

十一日

晴。山田清作、坂本謹吾、佐藤、関の在学生交々来る。佐藤民三郎ニ書を投す。新潟大火ニ付、栗林貞吉、古閑定、三浦宗春（皆類焼）ニ見舞状を出す。登校、事務を処す。坂本嘉治馬の書ニ接す。直ニ答ふ。高木骨董店を訪ひ、薄暮家ニ帰へる。

十二日

陰。和泉文三より基隆詰を命セられたる」（六四ウ）旨細書あり。朝倉亀三、山西清吉之書ニ接す。小林堅三再度新発田へ募集ニ赴かんとするに付、来訪。小崎懋紹介の北条陰田来訪。又、佐藤淳蔵学業の事ニ付来る。午後より登校事務を処す。

十三日

午前雨、後晴。雑賀豊太郎、小柴卯之七、久須美秀三郎、早川純三郎、江部淳夫、西本波太、交々来訪。半日接客」（六五オ）ニ消過す。午後より池畔ニ英堂ニ会し、紅白染わけ茶之湯帛紗を贈る。六時、久須美を矢来の居ニ訪ひ、晩餐の饗を受け珍蔵の書画を観る。

十四日

雨。高橋義彦、山崎恒四郎の書ニ接す。内田貢、栗林貞吉、佐藤正十郎の書状来る。登校事務を処す。本日、維持員会を開き、基金募集開始の件、米国より渡来の学生と野球試合の件等を協」（六五ウ）議す。余の基金部長たること、本会ニ於て決定、大隈伯令嬢久満子危篤ニ付、維持員総代として学長と共ニ訪問す。高田宅ニ晩餐を与にして雑誌発刊（早稲田文学、学報、外交時報合併之件）の件ニ付内議す。

十五日

晴。二週間ニ渉る低気圧全く去り、漸く暑気を覚ふ。佐藤伊三郎の書ニ接す。高橋義彦ニ書を投す。又印影を」

(六六オ)送る。佐藤某、立原菘翁等の幅を齎らし来たり見す。山田清作来る。雑誌見積を托す。半迂ニ俠骨禅心の印を托す。午後より登校事務を見る。表具屋ニ托し置ける書翰十七巻出来、今夜明進軒ニ基金募集専務委員会を開き、部署を定め人名調をなし深更散会す。

十六日

晴。大江乙亥門結婚問題ニ付来話。」(六六ウ)趣味記者藤井繁一ニ日記趣味を口授筆記セしむ。奥田芳彦来訪。田中訥言の蒙古襲来図二巻貸付、広田金松より支那籠を購ふ。昂、医師の診断を受けたる処、神経衰弱依然たりとの事にてしばらく休学セしむる事となれり。午後より登校、学長宅ニ於て基金募集の担当を定む。」(六七オ)

十七日

晴。半迂を招き、蔵品の箱がきをなさしむ。山田清作、雑誌の見積書を齎らし来る。右を携へて学長を訪問、一応の協議を為す。正午より登校事務を処す。江部淳夫の書ニ接す。冨山房坂本へ、壱千円約手入書状を発す(鴻池銀行より借用分、期限十月廿四日也)。晩間三輪潤太郎来訪。」(六七ウ)

十八日

晴。田中慶太郎(文求堂主人)、清国へ赴くニ付来訪。広田金松来る。小林堅三、芝田より一書を寄せ来り、募集の事を云々す。久須美秀三郎、坂本嘉治馬の書ニ接す。午後より刊行会ニ至り事務を処す。相沢辞職ニ付刊行会の前途ニ付、林と協議す。晩餐後、高田を訪ふて雑誌の設計をなし大体を定むるまでに数時間を費し、十二時家ニ帰へる。」(六八オ)

十九日

小雨。山田清作、中山速男来訪。山田清作同伴。出版部ニ抵り荒川信賢と協議して雑誌の見積を為す。坪内と雑誌之事を協議す。基金事務を処す。日清印刷会社ニ太田を訪ふて刊行会印刷の事を協議す。今日、少雨を意とセす華盛東大学の野球手ニ対し、早稲田の球手第一回の試合を為す。昆田文次郎の書ニ接す。」(六八ウ)

廿日

雨。図書館雑誌ニ近藤正斎逸事の続稿を投す。郷里の学

生大久保寛来り接す。奥田芳彦、其模写の粉本を齎らし来り見す。劉崇傑より、廿四日富士見軒へ招待状来る。台湾の賀田妻より来書あり。丹呉康平来訪。北堂の書を齎らす。併ニ物を贈らる。尽日家居、紅霞山房瑣記を筆す。

廿一日

」(六九オ)

早稲田の三雑誌合同問題ニ付、坪内、有賀、学長と交渉し全日を消す。半迂来訪。松井郡治より出京の報あり。

廿二日

雨。山田清作と話す。在郷の久須美秀三郎并ニ在京之同人次男ニ書を投す。登館事務を処す。午後より高田、坪内と会して雑誌合同之事を協議し、大体を決す。松井郡治、羽田」(六九ウ)智証来訪。晩間、英堂と池畔ニ会す。山田清作より集古十種印章の部見本摺を送り来る。高麗史俗字校訂の件ニ付、坪井九馬三の書ニ接す。

廿三日

晴。大祭日。尽日家居。山田雄太郎、松木弘の添書を齎らし来り見る。太田雪松、山田清作、中山速男、佐藤伊三郎、本昌賢介交々来り半日を消す。」(七〇オ)午後より山房瑣記を筆し、又雑誌之計画書を作る。法帖、名臣法帖外数巻、坪内ニ貸付。

廿四日

小雨。早朝、井上辰九郎を訪ひ基金之事を図り、登校事務を見、学長を訪ふて雑誌之事を協議す。午後より英堂ニ会す。今夜富士見軒ニ清人劉崇傑ニ招かれ、張元済ニ会す(元済字菊生、浙江省嘉典府海塩県の人、上海ニ於」(括弧脱)(七〇ウ)て著作編纂出版の事ニ従事す。支那社会辞彙を編纂する件ニ付意見を交換す。坂本嘉治馬の書ニ接す。高橋義彦より近作印影を送り来る。

廿五日

雨。並木覚太郎来訪。三浦宗春并ニ北堂の書ニ接す。中山速男、北条陰田来る。相沢を蛎殻町ニ訪ふ。帰国ニ付不在。刊行会ニ至り事を見る。佐藤伊左衛門、癌症ニ罹り出京、築地有明」(七一オ)館ニ病臥中ニ付、物を携へて訪問。又林を鈴木町宅ニ訪ふて刊行会の事を話す。帰路、高木方ニ立寄り、奥高麗の茶碗(鴻の池家旧什、銘釣舟)

を購ふ。価十七円也。坂本嘉治馬ニ投簡す。渋谷慥爾遺族扶助寄付金十円遣す。大雅堂刻印之件ニ付、萩野由之ニ書を与ふ。

廿六日

晴。賀田夫婦の書ニ接す。山田清作、」(七一ウ)旗野蓑織、吉田半迂来訪。登校事務を処す。張元済図書館ニ来る。図書展観、夕景去る。赤堀又次郎来話。吉田東伍又踵て来る。片山尚綱より袖珍集韻を贈らる。在米国朝河貫一の書ニ接す。

廿七日

晴、日曜。久須美秀三郎、萩野由之、山田清作の書ニ接す。小久江、種村を会して雑誌之事ニ付協議す。広田金松」(七二オ)書画を齎らし来り示す。直入之幅売却之為預く。萩野より大雅堂自刻二顆借受け観る。姫路家老寸翁之旧蔵也。朝倉亀三、山田清作来る。正午より児を携へて浅草ニ散策、午餐後墨堤ニ徜徉、百花園之秋草を観て帰へる。昆田文二郎、晩間来話。

廿八日

小雨。近藤清石の書ニ接す。萩野由之」(七二ウ)ニ書を与へて、大雅刻印代価之事を交渉す。学長を訪ふて図書館計算上之件、雑誌之件を協議す。小林堅三、帰郷、基金事務を取りつゝある内、母病気之ため帰京来訪。登校事務を処し、又出版部員と雑誌設計ニ付凝議し、夕刻帰宅。晩餐後雑誌之事ニ関し、島邨抱月を訪ふて、凝議深更ニ至る。」(七三オ)

廿九日

雨。山田清作、吉田半迂来訪。丸山松堂又来る。前島密翁之為白眼会を催すの件ニ付、談する所あり。且つ竹村良貞ニ伝言を托す。琳琅閣を訪ふて月末計算之事を話す。英堂ニ会す。夜来豪雨あり。山房瑣記を筆す。和泉文三より来書あり。出発之際立替金五十円領掌。

三十日

雨。江部淳夫より今朝三時、女児分」(七三ウ)娩之旨を報し来る。大雅印の価、減額ニ関し、萩野の答書を得。越佐会幹事来訪。永井一孝、山田清作来訪。並木覚太郎、新野亮太郎より来翰あり。登校、島村抱月と雑誌之事を議

す。更らに坪内、学長、東儀等と協議の末、来年七月、即早稲田文学か東京堂と契約を解くの時を待って合同を為す事として、延期ニ決す。南葵文庫十月十日開館ニ付案内状来る。清人張元済出発ニ臨み謝礼の書簡を」(七四オ)接手す。沢村幸一郎より葡萄一篭を贈らる。坂本嘉治馬の来書ニ接す。国庫債券三百円売却之通知也。今暁の豪雨は近来未曽有の激雨にて、市内の被害も甚しく、崖崩れ人畜死傷少からず。夜来又大雨あり。」(七四ウ)

十月

一日

晴又陰。今朝八時、青柳篤恒清国へ赴くに付見送を為す。高田学長と共ニ桂首相を官邸ニ訪ふ。不遇。鍋島直大(侯爵)を訪ふて学校の校賓たらんことをもとめ、又寄付の事を談す。丁酉銀行ニ立寄。図書館協会の保管金を処し、冨山房ニ坂本を訪ふて鴻池銀行より借入金之内五百円返金す。琳琅閣を訪ひ、更らに和田万吉を」(七五オ)帝国大学ニ訪ふて、午時松兼ニ飯し、千葉鉱蔵を訪ふ、不遇。帰宅後和田万吉之書ニ接す。安田善之助、林若吉、内田貢、幸田露伴之設立に係る同人欣賞会ニ入会を勧誘し来る。桂湖邨来訪。晩餐を饗し、蔵什を品評し、深更相別る。増子喜一郎、大鳥井弃三の書ニ接す。」(七五ウ)

二日

好晴。加藤万作来り、懸賞募集早稲田八景之事を云々す。千葉鉱蔵、小野文哉を訪ふ、共ニ不遇。高木弘を訪ふて骨董を見、午後より登校事務を処す。旗野蓑織来訪、一身上の事を云々す。半迂来り、席上印を作る。

三日

快晴。早朝基金之件ニ付箕浦勝人を訪ひ、昆田文次郎を訪ふ。又竹村良貞を訪」(七六オ)ふて前島男の為白眼会を起すの件ニ付協議す。登校事務を処す。黒川真道より墨水餘滴を贈らる。阿部蘇春来訪。午後、三木善八を報知社ニ訪ふて基金の事を談す。不日、額を定むべしとの挨拶を得て去る。刊行会ニ到り編輯事務を見、夜に入り帰宅。

四日

日曜。越佐会幹事六名来訪、会務を」(七六ウ)協議す。阿部

蘇春、大鳥井弃三来話。真島桂次郎より大雨の見舞状来る。高橋義彦ニ印影を郵送す。真島ニ答ふ。山房瑣記を筆し、尽日家居。川田楳吉の書到る。

五日

好晴。半迂ニ托したる「多言多敗」の印成る。直ちに印影を高橋橿堂ニ示す。小林堅三来訪。久須美秀三郎を訪ふて話す。又蔵幅を見る。丹呉翁ニ書を投して」(七七オ)北堂の病状を問ふ。川田楳吉ニ答ふ。午後安田恭吾を訪ふて骨董を購ふ。半迂ニ托したる嵐渓粉本張り付け出来。池田竜一を保険会社ニ訪ひ又木村条市を訪ひ、木邨と晩餐を共にして夜に入り帰宅。越佐会幹事来訪。

六日

晴。千葉鉱、和田万吉の書ニ接す。今朝八時、大島台湾長官帰任ニ付」(七七ウ)新橋ニ於て見送を為す。大森字山王ニ渡辺忠を訪ふて、学校の寄付を勧誘五百円出金の承諾を得て帰へる。池畔ニ飯し、英堂ニ会す。今夜紅葉館ニ同人伊藤重次郎、服部文四郎、神戸正雄帰朝の祝宴を張る。和泉文三より大稲埕駅助役及淡水線各駅助役を命セられたる旨通報あり。中山速男の書ニ接す。」(七八オ)

七日

小雨。半迂ニ托したる嵐渓粉本之張込之内二巻出来。登校事務を処す。校用ニ関し井上辰九郎、坪谷善四郎ニ書を投す。長谷川泰来訪、図書館の蔵本をしめす。石塚三郎、大里伝四郎来訪。石塚より生鮭壱尾贈らる。今夜石塚、大里を下谷伊予紋ニ招き晩餐を饗す。長谷川泰より来書あり。」(七八ウ)

八日

小雨。山田清作、竹村良貞、関某来訪。登校事務を処す。晩間吉田東伍、増田義一、旗野蓑織と偕楽園ニ会し、旗野一身上の件ニ付凝議す。

九日

快晴。三恵五江来訪。踵て小林堅三来る。明日新潟県へ募集之為出発ニ付、金五十円立替渡す。久須美秀三郎、在越後中野鉄平、斎藤」(七九オ)庫造、松井郡治ニ書を投す。又関西ニ図書館協会大会を催すの件ニ付、島、湯浅、今井三名へ宛照会状を発す。今夜、日本倶楽部ニ同人四十

余名会合、高橋邦三を招き、骨相心性ニ関する講話を聞く。久須美より来書あり。明夕晩餐ニ招請之事申来る。十六日光風会、十二日二水会之通知状来る。」(七九ウ)

十日

晴。田代亮介来訪。同仁会之前途を云々し、早稲田医学部と合同の事ニ及ぶ。内子并ニ昂の診察を乞ふ。北条陰田を竹村ニ紹介す。加藤館用ニ関し、山田刊行会の事ニ関し来訪あり。基金募集之件ニ付前島男を訪ふ、不在。登校事務を処す。午後より南葵文庫の公開式ニ臨み、其の列品を観、立食の饗を受けて帰へる。今夜久須美ニ招かる、辞してゆかず。大木操来訪。田原栄より来書あり。」(八〇オ)

十一日　日曜

晴。朝来頭痛を感す。中村幹、中山速男、加藤万作、吉田半迂交々来訪。安田恭吾来り画巻を示さる。且つ昨朝佐藤伊左衛門、昨払暁死去の事を報ず。石塚三郎来訪。佐藤を築地の旅館有明館ニ訪ふて不幸を吊ふ。刊行会ニ立寄、午哺之後、三河島の火葬場ニ至り棺を迎へ、事終りて帰へる。半迂より松簟を贈らる。不在中高田来」(八〇ウ)訪。夜に入り高田を訪ふ。高田より大隈伯ニ代り、明後日白川へ同行を勧めらる。直ニ諾す。印刷会社々長太田雪松、失体解職之事を聞く。雑談ニ刻を移し、十時帰へる。高橋義彦より近刻之印影を贈らる。不在中森田勇次郎来訪。長谷川泰、久須美秀三郎の書ニ接す。

十二日

晴。明日白川へ赴くに付、早朝より其の」(八一オ)準備を為す。加藤万作図書館協会之件ニ付、下林貞雄、慶一失踪の件ニ付来訪。江部淳夫、中山速男来訪。半迂刻印二顆、蘇春ニ投郵。丸山新十郎来訪。登校、菊池三九郎と早稲田八景を選む之件ニ付協議す。森田勇次郎来訪。午後より学報改良之件ニ付、島村抱月、種村宗介と協議す。半迂ニ嘱したる俠骨禅心の印成る。朝倉無声の書ニ接す。又桑田春風の絵はかき消息あり。」(八一ウ)

十三日

今朝七時三十分発汽車にて白川行を啓く。楽翁公贈位祝典ニ大隈伯代理として臨まん為也。一行高田学長、吉田

東伍と余也。鈴木万次郎、河野広中の同し目的にて同所へ行くに会し、同車す。十二時半白川へ着。土豪八田部五兵衛の家ニ投す。午餐の後直ちに式場ニ導かる。式場は南湖々畔の小丘に設けあり。徳川達孝、真田子爵、松平定晴代理等出席あり。式後共楽」(八二オ)亭に於て宴会あり。夜陰ニ乗し、湖面ニ燈篭を流し、全市民提燈行列をなし、湖を一週(ママ)す。燈光湖面に映し壮観云うべからず。此地、提燈行列ハ楽翁の創むる処と云ふ。夜涼甚しく、早く辞して旅宿ニ帰へる。綿服を借服、漸く寒を凌く。数通の絵はかきを宅へ発す。

十四日

快晴。土豪藤田新次郎、伊藤新右衛門」(八二ウ)来訪。白河文庫を東宮行啓記念として設くるよしを聞く。朝餐後、高等小学校内に開ける楽翁遺墨展覧会ニ臨み覧る。次て講演会に臨み、一行各々一場の演説を試む。余は楽翁か図書ニ貢献する事大なる事蹟を述べ、図書館経営の事ニ及ぶ。三時二十分、白河を辞して汽車ニ投し、九時過帰宅。井上辰九郎母の訃に接す。北堂の書ニ接す。並木覚太郎、長井一禾等の来書ニ接す。」(八三オ)

十五日

小雨。半迂来話。真島信城来訪。相携えて上野常盤華壇ニ午餐を与にし、文部省の美術展覧会ニ陳列の絵画を観、熊倉操の病を帝国大学病院ニ訪ふて帰へる。昆田文二郎より宗家の寄付金決定の事を報じ来る。菊池晩香より早稲田八景撰定の結果を報じ来る。田中一貞、斎藤庫造の書ニ接す。」(八三ウ)

十六日

小雨。阿部蘇春の書ニ接す。真島信城来訪、同伴、図書館ニ至る。偶々吉田久平来訪、相伴ふて大隈伯の庭園坐敷を案内し、伯ニ謁して吉田等ニ別る。館務并ニ基金事務を処す。松井郡治、池田善三郎の書ニ接す。井上辰九郎母死去ニ付香典をおくる。菊池晩香ニ投簡、八勝之事を云ふ。四時より図書館協会を一ツ橋学士会ニ開会す。晩香の返簡来る。」(八四オ)桑田春風ニ書を投す。

十七日

晴。祭日。相沢敏太郎、中山速男、牧野静斎、島村抱月

来訪。学長邸ニ於ける学校職員慰労会ニ臨み、散会前辞して越佐会員と新井迄散策を試む。薬師前茶店ニ集会、撮影之後、余一場の演説をなし、撮影、以て記念とす。」(八四ウ)

十八日

曇天。休日。本日米国艦隊来着。林縫之助、山田清作来訪。広田金松来り骨董を示す。梜斎の額面を購ふ。吉田尊一、坂本嘉治馬の紹介にて来り、早稲田学生之為共同購売所を設るの件に付来話。学報記者中村来る。商科学生之為、近々講演セんとする書翰を習ふ奨励と云ふ題にて二時間口授筆記セしむ。半迂より近作「無一物」の印を贈らる。」(八五オ)午後より児を伴ふて電車ニて市中を横行し、米国艦隊歓迎之光景を一覧して帰へる。白河町民の謝状到る。

十九日

晴。前島男を訪ふて半日話す。登館事務を処す。午後より田中穂積、島邨滝太郎、田中唯一郎と学報改革之件を協議す。五時より浅草代地深川亭ニ松平頼寿、大隈信常、田中唯を会して華族方面ニ基金」(八五ウ)募集の部署を定む。今夜十時、故佐藤伊左衛門の遺骸を越後へ送るに付、上野停車場迄見送之為抵る。不在中桑田春風来訪。

二十日

晴。桑田春風来訪。明朝再会を約す。白勢和一郎弟来る。学校之一件ニ付学長を訪ふて話す。登校事務を処す。午後より英堂を訪ふ。半迂より近刻を示さる。」(八六オ)

二十一日

山田清作、吉田半迂来る。桑田春風来訪。手紙雑誌ニ掲載すべき余の談話を筆記して去る。清河八郎書翰一軸貸渡。午後より登校事務を処す。並木覚太郎、蓑輪亥三郎より来書あり。伊豆出張中の江森泰吉より絵はかきを贈らる。小倉鎮之助より絵はかきの消息あり。学報ニ掲載すべき手紙を習ふ奨励と題する演説草稿を修め、半日を消す。宮崎」(八六ウ)初太郎来訪、物を贈らる。西条北堂より先考法事の菓子を贈らる。

二十二日

商科生ニ手紙を奨励する演説稿を筆して半日を消す。水

谷弓彦、田中穂積、島村滝太郎ニ書を与ふ。杉山令吉の書ニ接す。直ニ答ふ。中井敬所ニ書を与ふ。中野平弥より北堂十三回忌法事の菓子来る。円城寺清の訃到る。高木骨董」（八七オ）店を訪ふて香合三個を購ふ。三輪潤、種村宗八等の書ニ接す。関口泰輔来訪。真島信城帰宅を報し来る。夜に入り下林貞雄、おしほ来り。失踪中の慶一家ニ帰へりたりとて、其処分方を相談して去る。

二十三日

好晴。早朝登校事務を見、去って英堂を見る。高木方に骨董を弄し、木米製素焼の湯わかしを購ふ。帰宅後「手」（八七ウ）紙奨励」の稿を補ふて二三時間を費す。江部淳夫来話。三省堂の坂巻登介、其の近かく開版セんとする、百科辞書に載すべき大隈伯序文に加筆を請ふて去る。蓋し伯の命に依り成れるなり。上村観光外二三同人より絵はかき消息あり。

二十四日

晴。三省堂百科辞典、大隈伯序文ニ関し落後生を訪ひ、更らに島村抱月」（八八オ）を訪ふて学報改革案を協議すること多時、十二時去る。日清印刷ニ立寄り、刊行会ニ抵り林、相沢等と会務を話す。相沢と竹葉ニ晩餐を与にして別る。不在中平松憲夫来訪。水谷弓彦、川田楳吉の書ニ接す。安田恭吾より高芙蓉印、游印二顆を示さる。赤掘又次郎来訪。並木覚太郎の書ニ接す。おしほ、大木操同伴、慶一の件ニ付来話。」（八八ウ）

二十五日

晴。日曜。吉田半迂来る。中井敬所へ芙蓉印鑑定を乞ふ為半迂を遣る。並木覚太郎来訪。新潟募集之状況を云々す。円城寺清葬式に臨む。午後より図書館協会員と共ニ増上寺に抵り、光重信教之紹介を以て、同寺の三大蔵并ニ宝什を見る。夜分英堂を見る。江草重忠来訪、物を贈らる。」（八九オ）

二十六日

晴。紫安新九郎の書ニ接す。真島信城より梨子を贈らる。三十日欣賞会の通知来る。登校事務を見る。辻川、山田来訪。南葵文庫并ニ杉山三郎の書ニ接す。牧野静斎を訪ふて大隈伯序文并ニ早稲田八景の協議をなして帰へる。

二十七日

小雨。機、今朝長岡へ向け発す。丹呉翁より来書あり、北堂之病状を云々す。並木覚太郎来訪。数通の書状を発し、当用を処す。大隈伯を訪ふて新潟市有志者招待之事を云々す。桂湖村、広井一ニ書を投す。登校事務を処す。来月一日、上野東照宮ニ於て説文会を開くニ付、椛斎の遺什出陳セよと請求し来り、五点貸付。」(九〇オ)

二十八日

快晴。説文会大会の案内状来る。山田清作、辻川武之進等来訪。島村抱月、学報改革案を携へ来り協議に時を移す。会津八一の書ニ接す。新潟の桜井市作、吉田新潟市長、松井郡治、並木覚太郎を大隈伯邸に会し午餐を与にす。登校事務を処す。会津八一、佐渡の野沢、後藤ニ書を投す。近日消息展覧会を催すに付、家蔵の書翰全部を」(九〇ウ)図書館へ移す。渡辺千秋より鶏窓漫録を国書刊行会ニ於て刊行云々の件ニ付来書あり。

二十九日

晴。早朝出版部ニ出頭。小久江、種村と共ニ学報を六千」(八九ウ)の校友ニ頒つ設計をなして半日を消す。登校、学長と学報の事を協議し、大体決定す。基金事務を処して夕刻ニ抵る。英堂を見る。不在中矢野太郎来」(九一オ)訪、又越佐会より写真を贈らる。機、長岡ニ安着の報あり。山田清作より金子入書状を領す。桂湖村の書ニ接す。

三十日

晴。広田金松来り宗園の幅、米僊の幅を売る。矢野太郎来訪、一身上之事を協議して去る。小林堅三の報告ニ接す。安田恭吾を訪ふて芙蓉の印を還す。又、高木弘を訪ふて乾漆并ニ革文庫を購ふてかへる。夕」(九一ウ)刻より本所安田善之助方ニ欣賞会あり行く。和田万吉、岡田村雄と余と主人、合セて四人、携帯書籍を互に品評して十一時家ニ帰へる。此会は以上四人の外、内田貞、赤松範一、林若吉の三人を合セ、毎月一回、安田方ニ会合の規定也。

三十一日

朝来大雨あり。和泉を招き、馬琴遺書展覧会并ニ消息会之事」(九二オ)を処す。小林堅三、江部淳夫其他二三家へ郵書を発。登校事務を処す。一時より商科学生ニ対し、手

紙を習ふ事を奨励する学校の方針を二時間余演説し、杉山令吉と話して帰へる。半迂、有栖川実枝子台下のために刻セる二顆の印影を贈り来る。終日雨やまず、寒気冬の如し。」（九二ウ）

春城日誌

明治四十一年十一月以降

特イ4 1919 551

十一月

一日

日曜。晴。会津八一より絵はかき通信あり。早朝山田英太郎を訪ふ、不遇。高木方ニ立寄骨董を弄し、日本橋榛原に紙を購ひ、湯島切り通し下の某亭ニ飯し、英堂」（一オ）を見る。午後より上野東照宮社務所ニ開会セる説文会ニ臨み其の陳列品を見る。薄暮帰宅。不在中江部の初児来る。

二日

晴。早朝山田英太郎を訪ふ、不在。会津八一より一茶記念の絵はかきを贈らる。坪内逍遙より近刊著作を贈らる。越後真島信城へ薩摩芋壱俵を送る。登校、馬琴展覧会之事并ニ図」(二ウ)書館協会大会之事を処す。在長岡の機より来状あり。又、池田善三郎より来信あり。田原ニ越後の梨果を送る。午後山田清作来訪。高麗史序文漢訳之事等を協議して去る。夕刻より多嘉楽亭ニ図書館協会の評議員会を開き大会之順序を決定す。

三日

晴。天長節。黒川真道来訪、物を贈」(二オ)らる。小水磨写経表装を托す。文科生両人来って余の揮毫を乞ふ。直ちに一揮す。朝倉無声来訪、半日談話す。午後より終に同行。無声の居を訪ふて其の珍蔵の書を観てかへる。

四日

晴。今朝七時高田学長同伴、桂総理大臣を三田の私邸に訪ふて学校基金の事を申入る。即座五百円の寄付あり。去って松方侯を訪ふて同様の事を申入る。未決。但し」(二ウ)学校の校賓たることは直に承諾あり。又伊藤公を総監局に訪ふて話す。これ又校賓を諾セらる。登校事務を処す。又午後一時より早稲田学報を校友会ニ移すの件、其の改刷準備等ニ付、関係諸員と協議会を開き大体を決す。又商科生の為、書翰研究会を起すの件、余より発案し、今日学長并ニ田中穂積と協議の上略々決定、来年一月より開始の筈。物集高見の書ニ接す。高麗史例言漢」(三オ)訳を牧野謙次郎に托す。夕刻より池畔ニ英堂を見る。村山駒之助より例年の通薩摩芋一俵を送らる。半迂、曲亭馬琴翁の墓を訪ひ、碑銘を撫し終りたる旨を報し来る。表装を托し置ける書翰四軸出来。

五日

好晴。長谷川泰来訪。象山額（岱海翁著書の序跋）の写しを与ふ。安田」(三ウ)善之助、小林堅三、和田万吉より来翰あり。長岡の大里伝四郎より味噌漬一樽を贈らる。礼状を発す。江部淳夫ニ簡す。図書協会用にて文部省ニ出頭、大臣并ニ次官ニ面す。島田三郎を訪ふて図書館協会大会の演説を請ふ。登館、明日馬琴遺著展覧会、書簡展覧会開会ニ付其の陳列を試む。半迂来り馬琴の墓銘の搨

本を贈らる。又、馬琴の遺印を示さる。」(四オ)牧野静斎、馬琴の題跋ある日本外史写本を齎らし来り示さる。おしほ、下林貞雄同伴、慶一身上の問題ニ付多時凝議して去る。書簡研究会々則を草す。又、母校の恵与を校友に告け基金募集の応援を促し、一面には会務拡張のため会費を納むることを怠る可らさる趣旨を、校友ニ訴ふる文案を作り、未完からず。雅俗の繁忙、今日の如く甚しきはあらさる也。落合の高田弥兵衛、土地」(四ウ)代金の事ニ付不在中来訪。

六日

雨。朝餐前高田学長同伴、安田善次郎を本所横網町に訪問し、基金(ママ)金寄付之件、校賓の件、基金管理委員の件を請求す。管理委員たることは辞退、他の二件ハ承諾。江部淳夫より金子入書状、増子喜一郎より此程当座借入金之件ニ関し来状あり。本日より図書館ニ於」(五オ)て馬琴六十年忌辰会、消息展覧会を開く。新聞記者并ニ同人多く来観説明接待之為全日忙殺、夜に入り帰宅。朝倉亀三、小林堅三、石塚三郎、斎藤書店等之来書ニ接す。広田金松、言水加筆の句帳を買ハぬかと齎らし来り見す。

七日

雨霽。特ニ好晴を得たり。昨日ニ引つゝき」(五ウ)展覧会を開く。学生、公衆の来り観るもの二千の多きに達し、時ニ満員の札を出して入場を停止するの止むを得さるに至る。同人のためにしば〳〵説明し尽日忙殺、疲労を感すること甚し。夜に入り帰宅。在米国朝河貫一の書ニ接す。又安田善之助より来簡あり。

八日

晴。安田善之助ニ答ふ。広田金松来」(六オ)る。言水加筆の句集を購ふ。価八円也。吉田尊一、桑田正、浜村蔵六交々来訪。桑田、浜村を伴ふて早稲田の陳列を案内し、午後浜村と伊予紋ニ食事を与にし、印話をなして夕刻別る。不在中報知記者、国民記者某々来訪。島田三郎の書ニ接す。直ニ答ふ。

九日

晴。国民新聞記者島田賢平来り、手紙談」(六ウ)を口授筆記セしむ。小林堅三帰京、募集上之報告を為す。川田楳吉

ニ外套代為替送る。山田清作刊行会の件ニ付来訪。丹呉翁ニ書を投す。図書館協会大会紀念絵はかきに付、和田万吉より来書あり。直ニ返書を出す。登校事務を処す。大隈伯を訪ふて、基金募集の結果を報告す。田中穂積、島村滝太郎、巽来治郎を会して学報改革後の編輯法を協議す。又書簡研究会を設くるの件ニ付、田中穂積」(七オ)と協議す。又学長と基金事項を協議し尽日忙殺せらる。

十日

晴。菊池謙譲、朝鮮より帰朝ニ付旅宿吾妻屋ニ訪ふて、韓国に於ける募集の件を協議す。大島台湾長官を有明館ニ訪ふ、未着。愛国生命保険会社に清水彦次郎を訪ふて、募集の件を話し、山田英太郎を日本鉄道清算事務所ニ訪ふ、不」(七ウ)遇。二十一日日比谷図書館開館式案内状を領す。稲葉包通特ニ来り当日余に祝辞を読むべきことを請求す。午後英堂ニ会す。夕刻より矢来倶楽部ニ校友幹事会を開き、学校より恵与の倶楽部資金并ニ毎年補助金之件并ニ学報名簿を全校友ニ配布の件を協議して深更散会。不在中下林貞雄、慶一の件ニ付来訪あり。」(八オ)

十一日

晴。下林貞雄、慶一の件ニ付来訪あり。半迂来り近刻之印を示さる。萩野由之の来翰ニ接す。登校雑務を処す。白河町より先頃の礼として真綿を贈らる。午後より山田英太郎を清算事務所ニ訪ふて基金の事を云々す。又鈴木万次郎を愛国生命会社ニ訪ふて面談す。萩野、桑田、浜村、琳琅閣ニ書を投す。昨今両日の国民新聞、」(八ウ)余か手紙展覧会ニ就ての談話を掲く。亦本日発刊の早稲田学報、余の手紙奨励の演説を掲載す。

十二日

晴。山田清作、久志本常幸来訪。和泉を招き図書館の事を処す。高田弥一郎土地代金未納の件ニ付来話。十一時より千葉鉱蔵を訪ふて基金の事を談ず。夕刻より読売新聞旧同人、高田、松平、石井、藤野及」(九オ)余、本野露国大使を招飲。下林貞雄の書ニ接す。又、稲葉包通外二三の書ニ接す。坪谷善四郎養子結婚の案内状来る。(二十二日、富士見軒)。余の日記趣味ニ対する意見、本日発行の手紙雑誌ニ登載しあり。佐藤正十郎より電報の件ニ付伊

三郎へ書状差出す。

十三日

今朝種村宗八同伴、増田藤之助を訪ふ約なりしも、先方より断来りたるに」(九ウ)付ゆかず。在北京之田中慶一郎、文章学院の金子薫園、久志本常幸、朝倉亀三、真島信城等より来信あり。何れも答書を出す。半迂、小林堅三来る。吉田東伍ニ書を投ず。桑田正ニ書を与ふ。紅葉の十千万(ママ)堂日録を読む。余と往復の事を記する所多く、一読興味を感したり。午後学報記者を招き馬琴展覧会并消息展覧会出陳解説を口授し、半日を消す。本田信教来訪あり。夜に入」(一〇オ)り、萩野由之より態々使を以て山陽の手簡一通を見セに寄越す。鯨尺四尺に垂んとする長簡にて詩六首を録す。小野叔姪ニ与へたる書状、今迄額となしありし為色つきたるは、遺憾なれとも珍らしき書簡也。価三十七円と云ふは少しく高価なれとも双魚堂の看牌に一つ奮発セんか思案中也。」(一〇ウ)

十四日

晴。萩野由之ニ書を投して山陽書簡購入決意の事を申送る。同人より右書簡を張りつけありたる金縁額ブチを送り越す。真島桂次郎より例年の通鮭紅(ママ)を贈る旨郵報あり、直ニ謝状を出す。和田万吉より図書館大会の余興趣向ニ付来翰あり。桑田春風来訪。手紙雑誌ニ登載すべき材料を口授す。趣味記者藤井繁一、同時来訪。これにも二三の材」(一一オ)料を口授筆記セしむ。久志本常幸の書ニ接す。登校。学長より渋沢栄一を訪問したる結果報告あり。俄かに学校の未来ニ建設を要する諸般の造営物を個々に設計、其の費額を見積るの必要生じ、半日凝議して大体を定め、田原より技師ニ見積らセる事ニ決し夕景ニ至る。山田清作来訪。弘文館より会金弐百円受取。不在中日本并日本人記者伊藤知也来訪。出版部」(一一ウ)の為めに増田藤之助ニ辞書編纂の停滞を詰り、明後年七月迄脱稿を約す。新購山陽書簡、煤祓のため表具屋へ遣す。又書簡四巻表具注文。金子薫園の書到る。

十五日

晴。日曜。下林貞雄の書ニ接す。直ニ答ふ。慶一の件ニ付おしほ来る。三女スミ、十三才に達したるを以って、」

(一二オ)聊か祝意を表するため神田明神ニ伴ふて参拝。浅草辺ニ午餐を与にし半日遊び廻ハる。二女、四女も同伴す。午後芳園を訪ふて夜に入る。石黒忠悳の書ニ接す。又斎藤精輔より百科辞典第一巻成功に付謝礼之書状来る。女子大学より廿一日運動会の案内状来る。

十六日

好晴。北堂の書到る。又丹呉翁より為替入書状到来、先考墓建設費、法会勘定書来る。旗野雅美の書、児機の書到る。萩野由之へ山陽書簡額代三十七円也為替にて差出す。吉田東伍来話。登校事務を処す。前島男を中心として催す同人の会ニ付、男并ニ発起人と協議し、廿九日開会之事を決す。午後二時より日比谷図書館開館式ニ臨み、図書館協会々長として祝辞を朗読す。文部省田所秘書(ママ)館」(一二ウ)

(一三オ)の書到る。韓国京城菊池謙譲ニ書を投す。清国皇帝崩御ニ次き西太后崩御の事、公報を以って発表さる。紫安新九郎、三尾跋渉之記念にとて京都より高尾の絵はかき壱組、紅葉を摺りたる手拭を送り来る。

十七日

小雨。中井敬所、和田万吉の書ニ接す。敬所ニ答ふ。加藤を招き図書館協会大会の事を処す。杉本忠次へ炭代」(一三ウ)十五円為替にて送る。金弐十円琳琅閣へ鶏血石代仕払(ママ)、残金三十円尚払を要す。三省堂百科字典第一巻成功ニ付、来る廿二日、大隈邸ニ披露の会を開く旨案内あり。登校事務を見る。本日瑞典探検家ヘーヂン博士、本校広(ママ)庭に於て一場の演説を為す。此人文学者にて探検家を兼ね、五たび亜細亜の旅行を企たて、スタンレーに匹敵するの大家なりと云ふ。大木操の書ニ接す。」(一四オ)

十八日

晴。和田万吉の書ニ接す。又真島桂次郎より絵はかき通信あり。朝来学報原稿を校す。服部嘉香来訪ニ付早稲田文学の為、馬琴会消息会の事を口授筆記セしむ。参校事務を見る。フェねロサ法会の件ニ付委員より方法の通知あり。野沢卯市の書ニ接す。蔵六ニ托し置ける日本図書館協会大会記念印二顆癸刀ニ付印蛻を和田万吉へ郵送す。」(一四ウ)

十九日

晴。半迂ニ嘱したる象牙見留印出来。小西信八を小石川指ヶ谷町盲唖学校ニ訪ふて前島男の為めに催す白眼会の事を話し終って、各教場を参観し教授の方法を視る。校生集会、余の為めに「うれしきみよ」と云ふ唱歌を為、余感激、落涙を禁し得さりし。登校、学長と事務を処す。萩野の書ニ接す。京都竹泉ニ依頼し置ける磁印二顆出来到達。これは新潟伏見某」(一五オ)所蔵の木米の磁印を模蔵(ママ)セしめたる也。和田万吉より来書あり。蔵六ニ簡し図書館協会記念印の改刻をもとむ。今夜校友田川大吉郎、宮川鉄次郎之為同人富士見軒ニ宴会を開く。両人市助役ニ登任を祝する也。竹村良貞より白眼会ニ付来書あり。

二十日

晴。山田清作、小林堅三来訪、事務を処す。」(一五ウ)三浦竹泉、萩野由之、加藤才次郎へ書状差出す。桑田正ニ消息会之目録并ニ原稿を郵送す。学報ニ掲載之消息会記事を校す。登校事務を処す。斎藤庫造ニ書を与ふ。今夜新富町竹葉ニ相沢を招き金件を談す。機、越後よりかへる。宝田石油三千石の祝宴招待状来る。

二十一日

晴。小柴卯之七より蜜柑を送らる。安田」(一六オ)恭吾ニ簡して預りの骨董を返し、更らに良寛のマクリ二枚を購ふ。高木弘より鼠心経を購ふ。浜邨蔵六の書ニ接す。今朝二人曳にて荘田平五郎、豊川良平、近藤廉平、大倉喜八郎、松尾臣善、高橋是清を歴訪す。学校第二期計画ニ付近日大隈伯邸ニ都下富豪を会セんとするニ付伯之代理として出席を請ひ旁学校之事業を説明セん為也。午後加藤と共に日本図書(館脱)協会大会之準備」(一六ウ)ニ付協議す。

二十二日

小雨後晴。山田清作来る。島田翰より陸心源自筆草稿を贈らる。本日日本図書館協会大会開会ニ付、午前十時会場南葵文庫ニ抵リ、其の陳列品を観、会衆と撮影の後、庫主の饗を受け、午後一時より開会、余会長として諸般の報告を兼、一場の演説をなし、文部次」(一七オ)官岡田良平、島田三郎、今井貫一の演説あり。四時会を閉づ。今日来会者七十余名。会後茶菓の饗を受けて去る。丹呉翁、佐藤伊助ニ書を投す。又浜村蔵六ニ書を投す。

二十三日

快晴。大祭日。日本人記者伊東知也、速記者を伴ひ来訪。同誌五百号記念ニ新聞ニ関する余の閲歴談を徴」(一七ウ)す為めに新聞経営の今昔を比較して口授し、半日を消す。蒲生庄七出京ニ付、塩引并梨果を贈らる。午後より大隈伯邸ニ於ける校友観菊会ニ臨み、学長ニ代り一場の演説をなして基金募集ニ校友の力を致さんことを慫慂す。本日は昨日ニ引続き図書館協会の大会あり。本日は午後一時より慶応義塾を会場とし、懇話会を催す都合ニ付、演説後辞」(一八オ)して三田ニ急行参会す。余の三田慶応義塾を見るはこれを初とす。義塾の図書館ニ福沢遺墨の陳列あり。塾頭ニ面して会へ入会セしめ、夜に入り同所ニ懇親会を開き、卓上余一場の演説をなし、次て鎌田塾長等の演説あり。会するもの七十余名、意外の盛況を呈セしは幸なりし。食後和田万吉の意匠ニ係る娯覧会を見、出陳の品物を抽籤にて」(一八ウ)分配し、一同歓を尽して九時散会す。菊池晩香ニ嘱したる白眼会序成る。

二十四日

小雨。山田清作、辻川武之進来訪。慶応、南葵、岡田次官、島田三郎ニ大会ニ関する謝状を発す。萩野由之之書ニ接す。故人書簡二通封入、直ニ答書を発す。新潟の積善組合より巡回文庫の成蹟(ママ)を報じ来る。並木覚、」(一九オ)北越新報、今泉の書ニ接す。登校事務を処す。広井一来訪あり。午後大隈伯代理として高田慎蔵を訪ふ。晩問広井、田中唯と伊予紋ニ晩餐を共にし、快談十時ニ至って散す。金十円、三浦竹泉へ為替発送。

二十五日

晴。日本人伊東知也来る。獄窓漫筆を貸付す。和田万吉の書ニ接す。浜村蔵六、相沢敏太郎より来書あり。竹村」(一九ウ)良貞、牧野謙次郎ニ書を投す。丸山新十郎より来書あり。和田ニ答ふ。学校ニ簡して事を処す。相沢を弘文館ニ訪ふて金の要件を談す。三十日招待会ニ付、大隈伯代理として松尾総裁を日本銀行ニ、安田善三郎を安田銀行ニ、益田孝を品川御殿山ニ歴訪し、帰路高木弘方ニ立寄、士朗の書翰一巻を購ふてかへる。安田善之助より欣賞会之通知来る。又内田貢の書ニ接す。和田」(二〇オ)万吉

より陀羅尼集経（大学ニ版あり。天文年間の刻）一本を贈らる。間重新長簡一、士朗書翰一、此分修繕表具屋へ托す。真島信城より味噌漬壱樽を贈らる。台北賀田直治へ塩引二本送る。

二十六日

夜来の雨今朝霽。文三より泊水駅長となれる旨報あり。竹村良貞、相沢敏太郎の書ニ接す。午時英堂を訪ふて」(二〇ウ)半日を消す。和田万吉より関西図書館叛跡ニ付来翰あり。牧野謙次郎の書ニ接す。間重新書簡の考証に関し萩野ニ書を与ふ。半迂来訪。白眼看他世上人の印成る。

二十七日

晴。風。山田清作来訪。踵て長岡の新聞記者加賀某来訪。新年の新聞ニ掲載すべき余の談話をもとむ。即口授筆記セしむ。登校事務を処す。上海」(二一オ)商務印書館張元済より日本に来りし折の礼を云々し来る。並木覚太郎の書ニ接す。本日募集金、下賜金を包含し十五万円ニ達す。丹呉翁より西遊記代金為替券ニて郵送あり。石井勇より余の書翰ニ関する説を実業日本ニ掲載するニ付余の写真をもとめ来る。午後より相沢を弘文館ニ訪ふ、不遇。帰路高木骨董店を過き、石の置物を購ふてかへる。学校より校友会ニ」(二一ウ)贈与金之件、倶楽設置資件(ママ)之件、学報改革ニ関する件を云々し、校友一般ニ与ふる書簡起草中の処本日脱稿。今夜広井一と共ニ久須美秀三郎方ニ招かれ晩餐を共にす。偶々松井郡治来り会し募集の件ニ関し打合を為す。

二十八日

晴。早朝相沢を蛎売(ママ)町の居に訪ふて金件を協議し、忙中高木方ニ立寄り、」(二二オ)唐物朱塗箔絵文庫一、初代道八(露樵筆飲中八仙の)の茶瓶を購ふ。不在中近藤壮吉、蒲生庄七来訪あり。午後より登校事務を処す。本日維持員会を学校に於て開き、学校会計決算、理工科設備之件、校賓賛助員之件、基金募集の結果、二大祝節（天長節、紀元節）ニ関する件等を協議す。学長より毎日新聞を報知社に於て引受ける ニ付、主筆記者を早稲田より出す事ニ関し、余」(二二ウ)と田中穂積ニ対し密談あり。薄暮家ニかへる。三浦竹泉、萩野由之より来書ありし。坪谷善四

郎より婚儀の記念品を送らる。夜ニ入り牧野静斎、吉田半迂来る。高田弥一郎の書ニ接す。

二十九日

晴。風。並木覚太郎来訪。新潟県募集の事を報す。山田清作来訪。浜村蔵六、安田善三郎、斉藤庫造の書ニ接」(二三オ)す。文求堂を訪ふて二三の図書を購ふ。四時より山王星ヶ岡茶寮ニ於て白眼会第一回を開く。此会、前島男爵を中心として同人の会合也。余より開会の挨拶をなし、会名を男爵の号を取って白眼会と呼ハんことを発議し、衆の同意を得て白眼会序を朗読し、右序文を印刷セる端かきを配布す。男爵より謝辞あり。談笑湧くが如く薩摩琵琶等の余興あり、十時閉会を告く。来」(二三ウ)会者廿三名。毎年春秋二季開会ニ決す。此会は数十日余の苦心セる所なりしが成功を見たるは愉快ニ堪へす。

三十日

晴。早朝高田を訪ふて図書館費借入金の事を協議す。今日大掃除を行ふ。日比谷図書館より優待券を送り来る。前島男より白眼会発起ニ関する余の尽力を多とし、特ニ謝状を」(二四オ)贈らる。関西図書館連中より連署の絵はかき来る。尽日学校に在り事務を処す。午後五時より大隈邸に実業界の重なる人々を会し、基金募集の方法を協議す。渋沢男、安田善次郎、近藤廉平、池田謙三、早川千吉朗、豊川良平、森村市左衛門、前島男、中野武営、村井吉兵衛来会あり。大体を決して十時過散会す。和田万吉ニ書を投す。」(二四ウ)

十二月

一日

加藤万作、和泉信平を招き図書館協会会計上之事を処す。預り金之内五十余円渡す。日本人五百号ニ掲載之速記原稿を校訂す。十二時前上野ニ散策、帰途高木方ニ重箱(余の定紋あるもの)壱函を購ふてかへる。午後より又日本人原稿を校訂、夜十時ニ至る。野口多内清国より帰朝、来訪あり。」(二五オ)

二日

好晴。山田清作の書ニ接す。高田を訪ふて話す。登校事

務を処す。鷲尾義房、吉田真平の書ニ接す。相沢敏太郎、佐藤伊三郎ニ書を与ふ。午後より英堂を訪ふ。桑田春風の書ニ接す。春城雑話と題する記事、本日の趣味紙上ニ出づ。日本人記者ニ原稿を与ふ。不在中江部来訪。

三日

」(二五ウ)

晴。山田清作来訪。踵て桑田正来る。名家手簡十三巻、名家反故集一巻、手紙雑誌材料として貸付。登校事務を見る。又新年、学報の改革号発刊ニ付、本日島村、巽李軒、田中唯と編輯上之事を協議す。蔵六ニ書を投す。三時より帝国大学構内山ノ上ニ於て図書館協会特別委員会を開き、大会ニ決したる建議案三件（図書館設立ニ関する準則を発布之件、標準目録」(二六オ)編纂を為すに付補助を政府ニ請ふの件、貴重図書大帳を作るの件）を協議し、終って評議員会を開き、右三件を決し、大会の会計報告をなし、又関西文庫連の行動ニ付て論議する所あり。中井敬所より依頼之石印癸刀の旨を報じ来る。文求堂より帝大の買上けたる漢銅印叢割愛の交渉と、のひ、和田より承諾の書面来る（家蔵の印叢は」(二六ウ)上帙六冊にて帝大の文求堂より獲たるは下帙六冊也。余の割愛を冀望する所以也）。沖縄県那覇発久志本常幸の書ニ接す。今夜伝通院、日(ママ)を失し烏有となる。

四日

晴。小林堅三、広田金松、吉田半迂来訪。半迂ニ嘱したる春城の印成る。敬所ニ嘱したる石章二顆又成る。二顆の内」(二七オ)「孔方兄有絶交書」の白文一顆。殊ニ妙を覚ふ。登校事務を処す。千葉鉱、内藤久寛、斉藤庫造、清水銀蔵等ニ郵書を発す。佐藤伊三郎の書ニ接す。帝国大学ニ割愛を請ふたる漢銅印叢下半壱帙入手、これにて家蔵のもの完璧を得たり。欣喜言外に在り。英堂の電話に応じて行く。晩食を共にして帰へる。相沢敏太郎の書ニ接す。内藤湖南之嘱を受けて謄写中」(二七ウ)なりし簡明目録出来ニ付今日郵送す。

五日

晴。浜村蔵六ニ書を投す。今朝蒲生庄七を石井政吉方ニ訪ふて久闊を叙す。基金募集の件ニ付、伏見宮（家令御牧基賢）、閑院宮（家令松井修徳）、東伏見宮（令小野保

知）、久邇宮（令角田敬三郎）、北白川宮（令麻生三郎）、山階宮（令香川秀五郎）を歴訪し」（二八オ）十時より四時ニ至帰宅。和田万吉の来書ニ接す。和田ニ答ふ。相沢敏太郎、高田早苗、高橋義彦ニ郵書を発す。在コロンビヤ大学校友加藤泰次郎の書到る（図書寄贈の件ニ関す）。

六日　日曜

晴。相沢敏太郎、千葉鉱蔵、浜村蔵六の答書を得。朝倉無声、昆田文二郎来話。広田金松の書ニ接す。直ニ」（二八ウ）答ふ。午後半峰来訪、同伴、両国美術倶楽部（旧中村楼）ニ抵り久保扶桑売立の書画を一覧し、夕刻より半峰方へ千葉鉱蔵と共ニ招かれ、千葉ニ基金寄付の事を談じ、晩餐の饗を受け、千葉の浄瑠璃、半峰細君の鼓を聞き、九時帰宅。和田万吉の書ニ接す。不在中大江乙亥門結婚の事ニ付来訪。」（二九オ）

七日

一昨日に引続き宮家別当家令訪問を為す。有栖川別当岡田平太郎、小松宮家令日高秩父、閑院宮別当木戸侯、東伏見宮別当桂潜吉郎、華頂宮家令田中寿三郎、梨本宮家令坪井祥、竹田宮家令深山広を歴訪。二人曳人車にて終日奔走、夕刻帰宅。堀田璋左右の書ニ接す。弘文館より手形金五百円入手。」（二九ウ）

八日

晴。風。今朝学校ニ簡して事を処す。早朝二人曳の車を馳セて木戸侯爵を赤坂新坂町ニ訪ふて宮方へ請願之事を懇談す。又伏見宮別当馬場三郎を訪ふて帰へる。骨董商本山、久保扶桑払もの丶内、草坪書、魚籃観音の小幅を齎らし来り売る。七十円にて買入る（松年幅、廿五円にて遣す。下物（シタ）に）。半迂を招き、乾漆印の」（三〇オ）製作を托す。桑田春風来る。今夜明進軒ニ於て出版部の部員会を開き、本年度配当并ニ大学へ寄付の件等を協議す。小西信八、竹村良貞、山田清作の書ニ接す。

九日

晴。小林堅三、館之予算ニ付、加藤万作、アルバムの件ニ付来訪。本山豊実、相沢敏太郎ニ書を投ず。真島両家、佐藤伊助、和泉文三へ海苔各壱函」（三〇ウ）小包郵便にて発送。登館事務を処す。今夜紅葉館ニ清国へ赴きたる青柳

篤恒、柏原文吉郎、桑田豊蔵を招飲。桑田春風の書ニ接す。

十日

晴。広田金松来訪、勘定全済。琳琅閣ニ鶏血材残金三十円払終る。本山豊実を本所亀沢町ニ訪ふ、不在。浜村蔵六を柳島橋本ニ招き印話を為す。双魚堂珍賞の」(三一オ)印成る。又近く購入セる漢銅印叢下套を示す。蔵六激賞措かず。席上箱書を請ふて成る。英堂も此席ニ来り、半日清遊を為す。帰途英堂と逶邐、錦亭ニ立入り十一時帰宅。熱海樋口より例年の通り山芋を贈らる。

十一日

晴。山田清作と刊行会の事を協議す。堀田璋左右、名古屋の市史編纂主」(三一ウ)任として迎へられたるにつき上野(遠脱)富之助ニ紹介状を与ふ。英和字典(出版部事業)編纂ニ付編纂者増田藤之助と覚書を交換する必要起り、右書面を送付す。十三日盲唖学校の嘱ニ応し、馬琴、塙ニ関し一場の演説を依頼されたるにつき、其演説のあらすじを作る。午後より昆田、増田を訪問し、増田ニ依頼之件を叙し、十三日偕楽園ニ再会を約す。夜ニ入り燈下盲唖学校ニ明後」(三二オ)日なすべき演説の稿を修む。高田学長の書ニ接す。

十二日

晴。午後より雨。早朝小松原文相、岡部法相を訪ふ。又木戸侯を訪ふて過日宮方へ請願之結果を聞く。近日若干之寄付ある筈と承る。渡辺嘉一を赤坂の居ニ訪ふ、不在。官報局ニ局長を訪ひ、憲法発布当時の官報号外(憲法)を貰らひ受く。これは紀元節の折学校ニ必要あり。其」(三二ウ)際の用に供セん為也。正午学校ニ至り基金事務并ニ館務を処す。和田万吉より文部省ニ提出之建議案を送り来る。並木覚太郎、三国豊吉の書に接す。商科三年生を会して手紙奨励会組織ニ付説示する所あり。本日学校客室ニ理工科商議員会を開く。手島精一、阪田貞一、竹内明太郎来会。学校側より、田原、牧野、学長、余、并ニ幹事出席、設備ニ」(三三オ)関する緊要の事を評決し、明進軒ニ晩餐を与にして別る。出版部より本期配当金六百七十五円領掌。不在中三館一郎来訪。真島桂次郎より塩引、

赤塚啓作より味噌漬壱樽、田端より反物を贈らる。

十三日

晴。三館一郎来訪。九時より盲唖学校ニ至り盲生の為、馬琴失明後著作」(三三ウ)ニ従事セる苦心談をなし、一時間半ニ渉る。演説後小西校長の宅ニ招かれ午餐の饗を受け、其の珍蔵の書を観る。夕刻より増田義一を偕楽園ニ招き、余の土地経営ニ関する事実を陳べ、数人の助力者を得んとするに当り、増田ニ第一の助力者たらんことを請ひ、其の快諾を得。不在中足利学校の相場国厚来り、廿二日の釈典(ママ)ニ余の演説を請ふ旨を書き置して去る。斎藤精輔又来る。」(三四オ)小西信八、和田万吉ニ書を投す。賀田直治の書ニ接す。

十四日

晴。小滝淳来り旅行タイムスの為談話をもとむ。即ち旅行今昔の比較を談し筆記セしむ。江部淳夫、吉田半迂来話。三省堂斎藤精輔、百科辞典出版ニ付礼之為来り辞典を贈らる。桑田春風来訪、過日貸付名家書簡返却領収。高田弥一郎」(三四ウ)へ土地代金之内五百円也為持遣す。亡弟妻来訪。午後より英堂を見る。足利の長祐之、山口県佐野辰三郎の来翰あり。長場竜太郎出京、物を贈らる。

十五日

風。吉田尊一、早稲田倶楽部の件ニ付、赤堀又次郎、池田竜一又来る。池田同伴、高島鞆之助を紀尾伊町(ママ)の第ニ訪ひ、大学基金寄付の勧誘をなし」(三五オ)たる後、趣味談ニ時間を費し、午餐の饗を受けて帰へる。和田万吉、星野恒の書到る。相沢敏太郎、在越後北堂へ金子入書状を贈る。丹呉へ物を送る。午後三館一郎来訪、印材を示さる。唐物印箱を購ふ。飯田城主堀氏の旧什と云ふ。価十五円也。中井敬翁ニ刻料十円遣す。

十六日

晴。山田清作来訪。和田万吉同伴、文」(三五ウ)部省ニ出頭。大臣差支ニ付福原専門局長ニつき、図書館大会決議の次第を敷衍し、採納を請ふ。其の建議の条、一に曰く、図書館設備準則公布の件、二に曰く、標準目録編纂の件、三に曰く、社寺其他に保存の貴重書類登録ニ関する件。大体文部省の同意を得、引取る。午後より登校事務を処

す。杉山三郊の書ニ接す。足利の相場国厚ニ書を与ふ。」(三六オ)。

十七日

小雨。一天雪を降さんとす。加藤、和泉を招き事を処す。広田金松来る。支那物菓子器を購ふ。笹川臨風来訪、足利町講演会ニ出演を請求して去る。南葵文庫ニ斎藤勇巳彦を訪ひ、頼倫侯より大学へ寄付の件ニ付内談す。書を増田ニ投す。其答書を得。登校事務を処す。伏見宮家より過日出願之事ニ付明朝出頭すべしと申来る。羽田智証よ」(三六ウ)り来書あり。斎藤音作と示談成り本年末五十円、来年六月五十円にて解決の事を申来る。校友小暮貞助より来書あり。

十八日

風つゝき、殊ニ寒気を覚ふ。朝来疊屋来り、全家坐する所なし。加藤万作、矢野太郎、吉田半迂来訪。高橋義彦の書到る。十時伏見宮邸ニ伺候。早稲田大学へ各宮家」(三七オ)より一千円寄贈の御沙汰を受く。三田に鎌田栄吉を訪ふ、不遇。登校事務を処す。夕刻より偕楽園ニ於て判検事登第者の為めに祝宴を開く。別室にて高田、増田と会し余の土地経営ニ関し、高田、増田保証人となり、六千円を五分(年)にて五六の知人、組合債主となり、土地に相当之代価を生する迄持続の事決す。」(三七ウ)

十九日

晴。坂口五峰来訪、物を贈らる。奥田芳彦、広田金松来訪。大隈伯を訪ふて宮家より寄付の件を報告す。登校事務を処す。本日増田義一より土地経営資金壱千円借入る。保証人高田早苗、高木弘方ニ至り道具代金小口数件払済む(奥高麗茶碗十七円、紫檀棚十二円未済)。又縲(ママ)鈿秋草吸物椀五人前を購ふ。精巧無比、誇るに」(三八オ)足るの器也。文求堂へ学校分百円、銅印叢代金三十円也仕払。秋室印剰(汪敬淑撰)六冊、文求堂より示さる。垂涎三尺の者、然れとも価七十五円と云ふ。なか〳〵手の出し兼ぬる者也。笹川臨風の書ニ接す。今夜学校職員の忘年会あり行かず。中井敬所の書簡到る。

二十日

晴。朝餐後文求堂を訪ふて新来の図」(三八ウ)書を見る。秋

室印剰を六十円にて購ふ。池畔ニ英堂を見る。薄暮家ニ帰へる。不在中星野恒次男星野彬（文学士）来訪。坂本嘉治馬ニ書を与ふ。賀田菊より来状あり。

二十一日

晴。大江乙亥門より廿五日結婚式を挙るに付云々申来る。前島老を訪ふて談話半日を費す。参校事務を見る。坂口五峰来訪。相携」（三九オ）へて上野伊予紋ニ晩餐を共にす。

廿二日

晴。本日冬至。足利町民の催しに係る講演会ニ臨む為吉田洛城同伴、九時十五分両国発、東武鉄道ニ投し午後〇時三十分足利着、出迎之有志者ニ伴ハれて直ちに足利学校に至る。本日冬至に付釈奠あり。余の勧誘を納れて本年より町祭と為すこゝなり。町内戸々国旗」（三九ウ）を掲揚セり。余の一場の漫言忽ち実行を見る、中心愉快ニ堪へず。午餐後直ちに小学校に至り、釈奠を町祭となしたる事ニ付種々なる前途の注文と釈奠の折若干の醵金をなし、図書館の拡張を図り、終に染織専門の図書館となすべき事を論し、一時間半ニわたる。吉田は足利郷土史を語る。薄暮散会。足利学校に於て賜腊飲福（釈奠に用ひたる供物」（四〇オ）を頒つを云ふ）の饗を受け、足利館ニ投ず。今日殊に寒気を覚へ、特ニ毛織のシャツ、ヅボン下を求めて明日の備を為す。夜来大雨あり。

廿三日

雨霽。昨日ニ比すれは少しく寒気減す。相場国厚、長祐之、萩野万太郎等交々来訪。余携帯之東蝦夷地図（沿岸真景図）を相場ニ示し其の鑑定を請ふ。相場」（四〇ウ）ハ草雲門人也。一見、草雲五十才頃の筆なること疑なしと云ふ。乃ち箱書を請ふ。萩野は町内有数の富豪にて殊に多く草雲の幅を蔵す。余の為めに特ニ草雲筆范石湖の田園雑興の詩を画となセる八幅の画を取寄セ示さる。なか〳〵興味を感したり。十時頃より足利学校ニ抵り、これ迄一覧を経さる図書を特ニ請ふて一覧す。林鵞峰続本朝通鑑」（四一オ）の草稿（巻子本にて四十六巻あり）、三藐院筆菅公像賛、足利義氏筆人麿像、其他反故類等なりし。午後より鑁阿寺を訪ふて古文書を一覧し、萩野、長、相場等と足利館ニ会食の後午後四時半別を告け帰途ニ就き、七時五

分両国着、八時帰宅。島村滝太郎、水谷弓彦等の来書ニ接す。佐藤伊助より鮭子、丹呉より塩引、佐藤正十郎より越後」(四一ウ)香魚、村上漆器、日清保険より麦酒壱打、山田清作より羊羹歳暮として贈らる。

廿四日

晴。西条北堂の書ニ接す。真島信城より明年余五十ニ達するを賀すとて養老会員の製したる羽二重一匹を贈らる。坂口五峰、小西信八ニ書を投す。高田を訪ふて校務を話す。半迂并ニ本山豊実来る。」(四二オ)本山より崋山の小幅并ニ僧木庵の書翰を購ふ。価共十五円未払也。午後より戸谷部鉄太郎葬式ニ付、駒込吉祥寺ニ抵り、帰路萩野由之を訪ふ。葛城慈雲の書幅一を恵まる。晩間、朝井秀実一身上の事ニ付来訪。並木覚太郎より雉子を贈らる。

廿五日

晴。山田清作、加藤万作、田原栄、吉田」(四二ウ)半迂、おしほ交々来訪。真島信城ニ書を投す。中野平弥長男貫一郎の訃至る。悔状ニ香典、菓子料共三円添郵送す。和田万吉ニ書を投す。日清印刷会社より半期配当百株ニ付三十七円五十戔の通知を領す。赤堀又次郎より物を贈らる。大江乙亥門結婚之事ニ付早朝来る。内藤湖南より金子入書状を領す。本日午後三時、日比谷神宮社殿に於て大江乙亥門の」(四三オ)結婚式を挙く。名流二十数名臨場、余親族、友人を代表して臨場者ニ謝辞を陳ぶ。坂口五峰、山田清作の書ニ接す。相場国厚の書到る。

廿六日

晴。夜に入り雨。山田清作、和田万吉、児玉清貞等の書到る。早朝相沢敏太郎を訪ふて刊行会々計の事を談ず。相場国厚ニ書を投ず。池畔ニ英堂ニ会す。午後和田万吉を」(四三ウ)伊予紋ニ招き、印譜を携帯し互ニ玩賞す。香を焚き、抹茶を喫す。校書英琴を弾す。余、和田ニ謂って曰く、会心之友と会心の亭ニ会し、会心の書を閲す。人生の一楽也。況んや会心の妓坐ニ侍するをやと。夜に入り小宴を開き、深更迄談論して別る。学校より歳暮として金三百円贈らる。市役所より市図書館評議員之謝礼なりとて金三十円贈らる。台湾賀田直治より柑子、」(四四オ)木瓜、筍壱籃を贈らる。朝井秀実の書ニ接す。

廿七日

雨。在台湾嘉義原玄朴より来書あり。カラスミを贈らる。直治より紅茶を贈らる。今朝水谷弓彦来る。書物代之内百五十円也相渡す。菊池晩香、牧野静斎ニ書を投して本年いろ〳〵煩したることを謝す。在長岡機ニ旅費を送り帰宅を促す。在台の久志本常幸ニ投簡、越智修」(四四ウ)吉ニ紹介す。佐藤正十郎来話。東儀鉄笛より先人遺愛の利休矮箋書簡壱幅を贈らる。藤枝銀行より歳暮として反物を贈らる。賀田直治ニ書を投す。晩間大江夫婦謝礼之為め来る。

廿八日

雨霽。和田より先夜の礼を申し来る。山田清作より刊行会忘年会之件ニ付来翰あり。馬瀬長松歳暮之挨拶として」(四五オ)来り物を贈らる。新潟の松木よりすじこを贈り来る。琳琅閣勘定の内金五十円也相払。並木覚太郎来訪。小児を伴ふて神楽坂ニ物を購ふて歳暮ニ遣す。午後より刊行会印刷進行之件ニ付相沢、林を弘文館ニ訪ふて話す。夕刻より万安ニ刊行会の忘年会を開く。会の編纂事務は大体段落を告けたるニ付、これ迄尽力セる面々の功労と会の経歴を陳べ一場の演説を為す。」(四五ウ)会宴中強震あり、足利町長川島平五郎の謝状ニ接す。

廿九日

雨。朝より餅搗にて家人忙ハし。宗家の亀吉歳暮ニ来る。高木骨董店を訪ふて光琳写永楽作色紙形皿、面箱、小屏風かラを購ふ。価十七円即納。不在中坂口五峰来訪あり。半迂ニ嘱したる新年端書用印数顆癸刀。東儀季治ニ村上擬堆朱烟」(四六オ)草函を贈る。牧野謙次郎より来書あり。故渋谷慥爾未亡人并ニ遺子処分ニ付寄付金管理委員より報告書来る。喜代四来る。又本田信教、下林貞雄来訪。巽李軒の書到る。

三十日

晴。坂口五峰、田代亮介、朝倉亀三来訪。佐藤貞雄、本間十三郎、国民新聞社等より物を贈らる。田端并ニ」(四六ウ)羽田へ歳暮の品を贈る。五峰と相携へて伊予家ニ午餐を与にし、終に野沢家ニ至り夜に入り帰宅。山田清作の書ニ接す。今夜機、長岡より帰宅。小滝淳の書ニ接す。水

谷へ書物代金（学校分）百五十円為持遣す。前後三百円となる。弘文館より請取るべき金円埒明かず、為めに深夜山田清作へ書を投じて云々す。熱海発高田半峰の書并矢野太郎の書到る」（四七オ）。

三十一日

晴。山田清作、昆田文次郎、大石理円来訪あり。本所本山豊実へ人を遣し、華山の小幅返す。高田半峰ニ書を投ず。本日弘文館より三百円受取（内百円来月分年末費用嵩みたる為前受取）。金百円学校分、十五円自分勘定の内琳琅閣へ渡す。鳥居大路七十円の内三十円也相渡す。朝倉亀三へ使を遣し沢庵書翰幅借覧。三館一郎より購入の唐物」（四七ウ）印簞笥代十五円渡済。昆田より飯寿司を贈らる。半迂に嘱したる平安の仰鳥の印共ニ奏刀。落合村高田弥一郎より歳暮として沢庵四斗樽壱本贈らる。十数日来ポツ〳〵仕払、本日にて全く済む。落合土地代金を除き千八百円の甚額ニ達す。余の経済として空前の事也。」（四八オ）

巻尾ニ書す

一　本年は尤も健康なりし年。

一　……尤も多忙なりし。

一　……学校ニ幾許貢献セし年。

一　……尤も勤勉なりし……

一　……種々の考案ニ頭脳を費したる……

一　……尤も多く金を使ひたる……」（四八ウ）

一　……道楽趣味を満足セしめたる……

一　……近年稀れに長時間の演説をしば〳〵セし……

一　……本年は自家の意見の尤も行ハれたる年なり。

一　……尤も愉快に感したる年也。

毎歳此日誌は、二巻を一年の用に充て幾許の余地を存するを例とセり。本年は二巻にして足らず、終に此」（四九オ）の一巻の央迄書くに至れり。本年の多事知るべし。

明治四十一年十二月尽日　　春城識」（四九ウ）